

縄文時代後・晩期集落における中央窪地の形成について
—千葉県内の事例を中心に—

沖 松 信 隆

目 次

1. はじめに	27
2. 研究略史	27
3. 事例紹介	30
(1) 袖ヶ浦市上宮田台遺跡	30
(2) 君津市三直貝塚	32
(3) 市原市祇園原貝塚	37
(4) 松戸市貝の花貝塚	37
(5) 流山市三輪野山貝塚	40
(6) 佐倉市井野長割遺跡	42
(7) 栃木県寺野東遺跡	44
(8) 埼玉県赤城遺跡	47
4. 事例の類型化と検討	49
5. おわりに	55

1. はじめに

栃木県寺野東遺跡の調査⁽¹⁾を契機に環状盛土遺構が認識されて以来、縄文時代集落の研究は新たな展開を迎えるようになってきた。従来から議論されてきた環状・馬蹄形貝塚や集落の中央窪地の性格も、環状盛土遺構と絡めて見直す動き⁽²⁾となってきた。縄文時代集落の中央窪地は、早くから意識されてきた問題であり⁽³⁾、盛土遺構の発見とともに、その堆積土の供給源として改めて注目を集めている。いわば古くて新しい問題というわけだが、その成因についてもいまだに結論に達してはいない。盛土遺構の認識以来、中央窪地と盛土遺構に関する分析はいくつか試みが成され⁽⁴⁾、集成作業も行われてきた⁽⁵⁾。これまでの研究では、盛土遺構自体に力点が置かれた分析が目立つように感じる。そこで、改めて窪地にスポットを当てた検討も、基礎的な作業として必要ではないだろうか。

近年は県内でも盛土遺構や中央窪地を伴う後・晩期集落の調査例が蓄積されつつある。君津市三直貝塚をはじめ、流山市三輪野山貝塚、佐倉市井野長割遺跡のほか、最近では阿部芳郎氏による北総地域での調査例⁽⁶⁾が知られている。本稿では、これら千葉県内の代表的調査事例と、最近筆者が調査を担当した袖ヶ浦市上宮田台遺跡を取り上げ、県外の代表的な事例とも比較しながら、後・晩期集落における中央窪地の様相について検討してみたい。そして、各事例どうしの共通点や相違点を抽出することにより類型化を行い、合わせて中央窪地形成の経緯に関する予察も試みたい。なお、中央窪地に対する表記は、文献により「凹地」とされるものがあるが、本稿では引用文を除き、「窪地」の表記で統一する。

本稿の提出後、シンポジウム『井野長割遺跡を考える』が開催された⁽⁷⁾。本稿にとって看過できない動向であるため、内容の一部を修正・加筆した。なお、環状盛土遺構や斜面盛土に対する呼称は各遺跡によっても状況が違い、同シンポジウムでも遺構と捉えることへの疑義が示されている。こうした状況をふまえて、本稿ではこれ以降原則的に‘遺構’は付さずに‘盛土’で統一する。

2. 研究略史

縄文時代集落の研究は、当初の時期には貝塚の研究を中心として推移してきた。初めて堅穴住居跡を発掘した⁽⁸⁾市川市姥山貝塚では、1932年の報告の中で「ソノ中央部、貝殻散布ノ希薄ナル地点ノ特ニ低クシテ、恰モ盆ノ底ノ如キ状態ヲ呈スルコトナリ」（松村・八幡・小金井1932）とあり、環状貝塚の中央部が低くなっていることを指摘する記述がみられる。その後1943年には千葉市草刈場貝塚において初めて馬蹄形貝塚の中央窪地を意識した調査がなされたが、「中央の凹みは堅穴もなく、遺物もなく、上層から基盤まで、なんの変哲もない壤土層を掘ったにすぎない。」（酒詰1967）とされ、積極的な興味をひくには至らなかった。一方で1950年代には神尾明正氏によって千葉市園生貝塚の調査が行われ、地理学的な観点から馬蹄形貝塚と中央窪地の地形の説明を試みている（神尾1963）。これに前後するが、和島誠一氏は草刈場貝塚や長野県尖石遺跡の調査成果を踏まえ、環状貝塚や集落の中央部は集落の規制により意図的に空白になったものと考え、これを「中央の広場」と呼び、集落の集団生活の結集点であったと推測した（和島

1948)。

1960年代に入ると、各地で大規模な調査が行われるようになり、開発に伴う緊急調査も生じてきた。こうした動きのなかで、宅地開発に伴って松戸市貝の花貝塚の調査が行われた。貝の花貝塚では、今日の後・晩期集落の調査でも共通に認められる事象が早くも指摘されており（八幡・岩崎・関根1973）、中央窪地の研究史上重要な位置を占めよう。調査の所見として岩崎卓也氏は、窪地の内部に「柱穴様のピットが多数発見されたこと」や、「数カ所の焼土面の存在」を指摘する。また、「晩期前半の土器片等が、表土層からローム層直上まで一様に包含されて」いることや「凹地の北縁付近では、ローム面の荒れが目立ったこと」から、晩期のある時期に窪地がローム面まで削平されむき出しになっていた状態を想定した。後に関根孝夫氏は、焼土面の存在と特殊遺物の出方から、中央部の共同作業の場としての空間と祭祀的行為を想定している（関根1982）。

貝の花貝塚とはほぼ同時期に、千葉市加曽利南貝塚の調査が行われた。トレンチ調査であるが、ボーリング調査により成田層までの堆積状況を確認することができた。その報告では、窪地の成因について地理学と考古学双方の立場からの所見が述べられている（杉原編1976）。貝塚爽平・杉原重夫両氏はまず窪地地形と宙水の因果関係を説いた上で、貝塚の自然崩壊が進んでいないことと窪地内部に遺構が存在することから、遺跡が形成される以前にすでに窪地が存在していたと結論づけた（貝塚・杉原1976）。また窪地内では黒土の堆積が薄い理由について、周辺にくらべて浸食を受けやすかったことを挙げている。これらの所見に対し後に江原英氏は、宙水説によってはこの遺跡の窪地の成因が説明できていないことを指摘し、自然地形説の根拠自体が晩期までの人工的削平を否定しうるものではないと述べている（江原1999b）。同じ加曽利南貝塚の報告のなかで、清水潤三氏は、貝塚内部では表土が薄く顕著な遺構に乏しい一方で、土偶・土板のような特殊遺物が出土していることを指摘し、貝塚内部のソフトロームが薄いことから人為的作用の疑いを表明した（清水1976）。

1970年代から1980年代にかけては、市史や発掘報告書のなかに窪地に関する記述がみられる。『市川市史』では自然地形説に基づいた記述がなされている。杉原氏は窪地の成因諸説を紹介した上で、市川市内の調査成果を用いて地下宙水による窪地の形成を説いた（杉原1971）。遺跡紹介の項では、杉原荘介・戸沢充則両氏が曾谷貝塚の中央窪地を例にとりながら、馬蹄形貝塚と窪地の関係を自然地形説の立場から説明している（杉原・戸沢1971）。この時期、市原市西広貝塚・祇園原貝塚や佐倉市吉見台遺跡など、中央窪地を伴う後・晩期の遺跡群が調査された。西広貝塚の報告のなかで米田耕之助氏は、貝塚中央の窪みについて自然地形説に依った説明をしながらも、ローム面が露出していた蓋然性を指摘する。そして窪地の一般的な成因として宙水説を紹介するが、西広貝塚にはあてはまらないとする（米田ほか1977）。祇園原貝塚の報告では、中野修秀氏が遺構外出土の遺物群に対して中央広場との関連性を示した。中野氏は中央広場での遺物の少なさを強調し、窪地の縁辺部で出土した遺物群を意図的な清掃行為の結果と説明している（中野1983）。吉見台遺跡では、遺構の分布と遺物の出土は高まり部分に多く、窪地での希薄さとの対比が示された（近森・山岸ほか1983）。

1960年代後半から1980年代にかけては、中央窪地の成因について論議が盛んになった時期でもある。すでに記したように、貝の花貝塚の人為的削平説をはじめ、加曽利南貝塚を代表とする自然地形説や、祇園原貝塚での清掃行為などが提起されてきた。今井公子氏はこれらの諸説を整理しながら、「中央窪地の清潔なる維持」という行動原理に成因を求めた（今井1982）。また、中央窪地の性格を論じた説として、船

橋市高根木戸貝塚で示された湿地説（西野・岡崎ほか1971）や、後藤和民氏の干貝加工場説（後藤1973）を挙げておきたい。中期の環状集落である高根木戸貝塚の報告において、西野元氏らは中央窪地を多湿地で居住に適さなかった場所と捉えている。後藤氏は、千葉市内の大型貝塚を例に、一般的な集落と異なる共同作業の場としての役割を強調した。

1990年代に入り、栃木県寺野東遺跡での環状盛土‘遺構’の認識以来、中央窪地に関する議論は新たな段階を迎えた。堀越正行氏は、中央窪地をもつ馬蹄形貝塚を議論の対象とした論文（堀越1995）を発表する。堀越氏はまず千葉県における大型貝塚を伴う集落の立地を、中心部が窪み周囲が高まる「中央部コロセウム型集落」と、逆に中心部が高い「中央部ステージ型集落」に分類した。そしてコロセウム型集落にみられる窪地地形と馬蹄形の高まりに対する認識を概観していく。その過程で中央窪地についての解釈諸説を整理し、堀越氏自身は自然地形説を評価する。窪地地形は関東地方のローム台地に広く分布するもので、「縄文人によって利用されなかった窪地も多くある」という事実を提起し、「窪地地形は集落立地以前の自然地形である」と述べた。さらにそうした窪地を「無」の空間として維持するために、清潔に維持していたと想定する。一方で窪地を囲む馬蹄形の高まりは、「あらゆる生を失ったもの」の送り場と考え、こうした観念が「純粹に昇華したものが・寺野東遺跡の環状盛土遺構であろう」と説いた。堀越氏の環状盛土遺構の理解に対して、阿部芳郎氏は平坦面を拡張して居住施設を構築するという実利的な解釈を示した（阿部1996）。それゆえ窪地の形成も、掘り窪めることが目的なのではなく、盛土による整地と居住施設の構築の結果と考えている。

この後も現在にいたるまで、盛土遺構との関わりのなかで中央窪地に言及するケースが多いと言えよう。江原英氏は環状盛土‘遺構’の類例を集成する（江原1999a）とともに、中央窪地に関する議論まで遡る研究史を整理した（江原1999b）。研究史概観のなかで、堀越正行氏の窪地自然地形説に対し、自然地形としての窪地の存在を認めながらも、人工的な要因の否定にはならないとし、二者択一的な発想に懸念を示す。後に堀越氏は、盛土‘遺構’を含めた大規模遺構を整理して、縄文時代の土木工事として一般向けの講演を行った（堀越2001）。このとき三直貝塚の窪地については人為的な削平を認めている。江原氏は、さらに環状貝塚と環状盛土との関係という観点から研究史上の論点に触れ、旧稿の訂正・補足も行っている（江原2001）。

このほか最近の調査事例の中で、宮崎県本野原遺跡での後期集落に伴う窪地（吉住・森田・金丸2003）が注目される。関東地方の同種の集落との関連は不明であるが、窪地を囲むように遺構が配置される点や、窪地内では遺構が希薄になっている点など共通した構造が窺える。県内の例に目を転じると、流山市三輪野山貝塚での中央窪地の調査と斜面盛土の検出（流山市教委2001、同2004）、君津市三直貝塚（吉野2001ほか）・佐倉市井野長割遺跡の盛土と窪地の調査（戸谷2004、小倉2004ほか）、袖ヶ浦市上宮田台遺跡での窪地の調査例（沖松2005）などが成果として挙げられよう。また、阿部芳郎氏による佐倉市曲輪ノ内貝塚での窪地の調査（阿部2004a）を加えておきたい。

井野長割遺跡は遺跡発表会でも継続的に取り上げられ（小倉2001、田中2003）、県内外の遺跡の事例と比較するシンポジウムが最近開催された（佐倉市教委・（財）印旛郡市文セ2004）。このなかで阿部芳郎氏は、佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査成果を用いながら、中央窪地をもともと存在した自然地形であり、人為的な掘削の結果によるものではないと説いた（阿部2004b）。自然地形説を具体的な発掘調査と表面観察で検証した事例として評価されよう。また堀越正行氏は自説の自然地形説を再確認する一方で、寺野東遺跡で

は掘削の可能性もあるとし、遺跡ごとの状況の違いを指摘している。このシンポジウムの主要な論点は環状盛土にあるが、盛土と密接に関連する中央窪地の性格を考えていく上でも、遺跡によってその成立要因が一律ではないことを示した点に意義があった。

3. 事例紹介

今回は千葉県内の6遺跡と県外の2遺跡を検討対象とした。県内の遺跡については、研究史で紹介した事例の一部と、なるべく最新の調査成果が明らかになっているものを対象とした。無論ここで取り上げる遺跡以外にも、既報告の市原市西広貝塚（米田ほか1977）・菊間手長貝塚⁽⁹⁾、佐倉市吉見台遺跡⁽¹⁰⁾、鎌ヶ谷市中沢貝塚⁽¹¹⁾や、最近の調査例となる佐倉市宮内井戸作遺跡⁽¹²⁾・曲輪ノ内貝塚（阿部2004a）など、注目すべき事例があるがこれらとの比較検討は今後の課題としたい。県外の遺跡は、中央窪地を面的に調査している2遺跡を選んだ。

(1) 袖ヶ浦市上宮田台遺跡（第1図、第2図）

袖ヶ浦市の南部に位置し、小櫃川の支流にあたる檜水川の支谷に面した標高60～68mの台地上に立地する。首都圏中央連絡自動車道の建設に伴い、平成14年度から平成15年度にかけて財団法人千葉県文化財センターにより調査された。調査の結果、後・晩期の集落に伴う中央窪地を検出した。このほか旧石器時代の石器集中地点や古墳時代から平安時代までの集落、中・近世の台地整形遺構・居館趾などを検出している。調査区中央部には、中・近世の地形改変による比高差約2mの段差があり、これを境に便宜上標高の高い東側をA区、西側をB区と呼称している（沖松 2005）⁽¹³⁾。



第1図 上宮田台遺跡地形図 (S=1/5,000)



- 1. 表土・灰褐色土
- 2. 褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 黒褐色土

第2図 上宮田台遺跡A区全体図

遺跡は北西に突き出た舌状台地に立地し、A区の中央部には南北に長い窪地地形が存在する。東西約40m、南北約65mの規模を有し、北側は閉塞しかけながら谷と合流し開口する。現地形との比較で興味深いのは、開口部の北側にあたる調査区外が谷ではなく尾根状になっている点である。窪地内の土層は、表土の下に炭化物・骨粉を含む暗褐色土・黒褐色土が見られ、その下は地山との間に褐色土が堆積している。窪地内の地山は、中心部で立川ロームV層までが消失している。またその表面はかなり凹凸が著しい。なお、窪地周辺の南東部でも、地形的には平坦でありながらソフトロームがやや欠如する部分がみられた。窪地内の土層には後・晩期の遺物が多量に含まれ、最下層の褐色土は晩期中葉を主体とする。

窪地の西側では、窪地内のような黒褐色土を検出しないかわりに再堆積と考えられる黄褐色土が観察された。遺物包含層も検出されているが、窪地内の出土状況とは異なり、晩期の遺物は少なく、後期の遺物が目立つ。また、晩期の住居跡が重複する場所が数地点あり、地山よりも高い面で検出できた。中・近世以降の攪乱の影響で遺存状況は良くないが、本来盛土が存在していた可能性がある。一方、窪地の北側から北東部にかけての斜面では、再堆積のローム土を検出した。地山直上から1m以上堆積し、後期の遺物が含まれる。黒色土系の間層は見られないので、短期間での堆積が予想される。

縄文時代の遺構はそのほとんどがA区で検出された。集落は後期前半から晩期中葉までのものであるが、主体となる時期はおよそ堀之内式期ないし加曽利B式期とみられる。後期の住居跡はA区の北東部に集中しており、概して北東部から西側にかけて弧状に分布する傾向がある。また調査区南側縁辺部の分布状況から、さらに南側の調査区外にも弧状に展開している可能性が考えられる。後期安行式の段階では、遺物量は多いものの、遺構の数など詳細は今後の検討による。晩期になると、住居跡が窪地の北側から西側にかけての特定の地点に集中する傾向がある。このほか小規模な地点貝層がA区北側の斜面縁辺付近で検出された。時期は堀之内式期から加曽利B式期に属する。

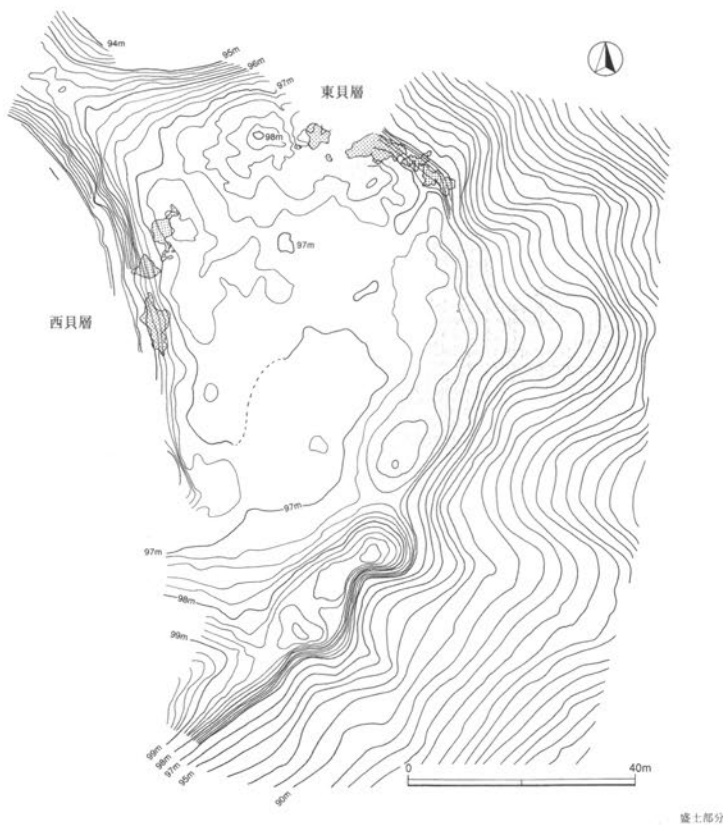
中央窪地と遺構の分布状況の関係で注目されるのは、後期前半の住居跡が窪地の内部にまで展開している点である。これらの遺構は覆土のプランが確認できず、炉とピットからプランを想定した。そして炉やピットの多くは、窪地内覆土最下層の褐色土を除去してから検出している。これらのことから、調査段階で検出した中央窪地と後期前半の集落は直接関連性がないと言えよう。遺物の出土状況をもみても、窪地内で後期前半ないし中葉の遺構を多く検出しながら、包含層には晩期の遺物が多く、逆に後期前半の遺物はほとんど含まれなかった。また窪地外側の北側斜面や西側の包含層では後期の遺物が目立つ。

(2) 君津市三直貝塚 (第3図, 第4図)

君津市の北西部に位置し、畑沢川流域の標高約99mの丘陵上に立地する。水田面との比高差は35mに達する。館山自動車道の建設に伴って、平成11年度より平成13年度まで財団法人 千葉県文化財センターによって調査された。調査の結果、中期後半から晩期前半の集落とともに地点貝層や盛土‘遺構’が検出され、環状盛土‘遺構’に堅穴住居跡を検出したことで注目を集めた(吉野2001)。その後平成14年と平成15年には、財団法人 君津郡市文化財センターにより遺跡西側の地形測量とトレンチ調査が実施され、貝層の分布状況と西側貝層の概要が明らかになった。また、西側盛土部分についても東側と同様の成果を得ている((財)君津郡市文セ 2002, 2003)。

県文化財センターと君津郡市センターの調査成果から、遺跡の立地する丘陵は三方を谷に囲まれた尾根状を呈し、西側の急傾斜面も貝層の分布状況からある程度当時の地形をとどめていることが判明している





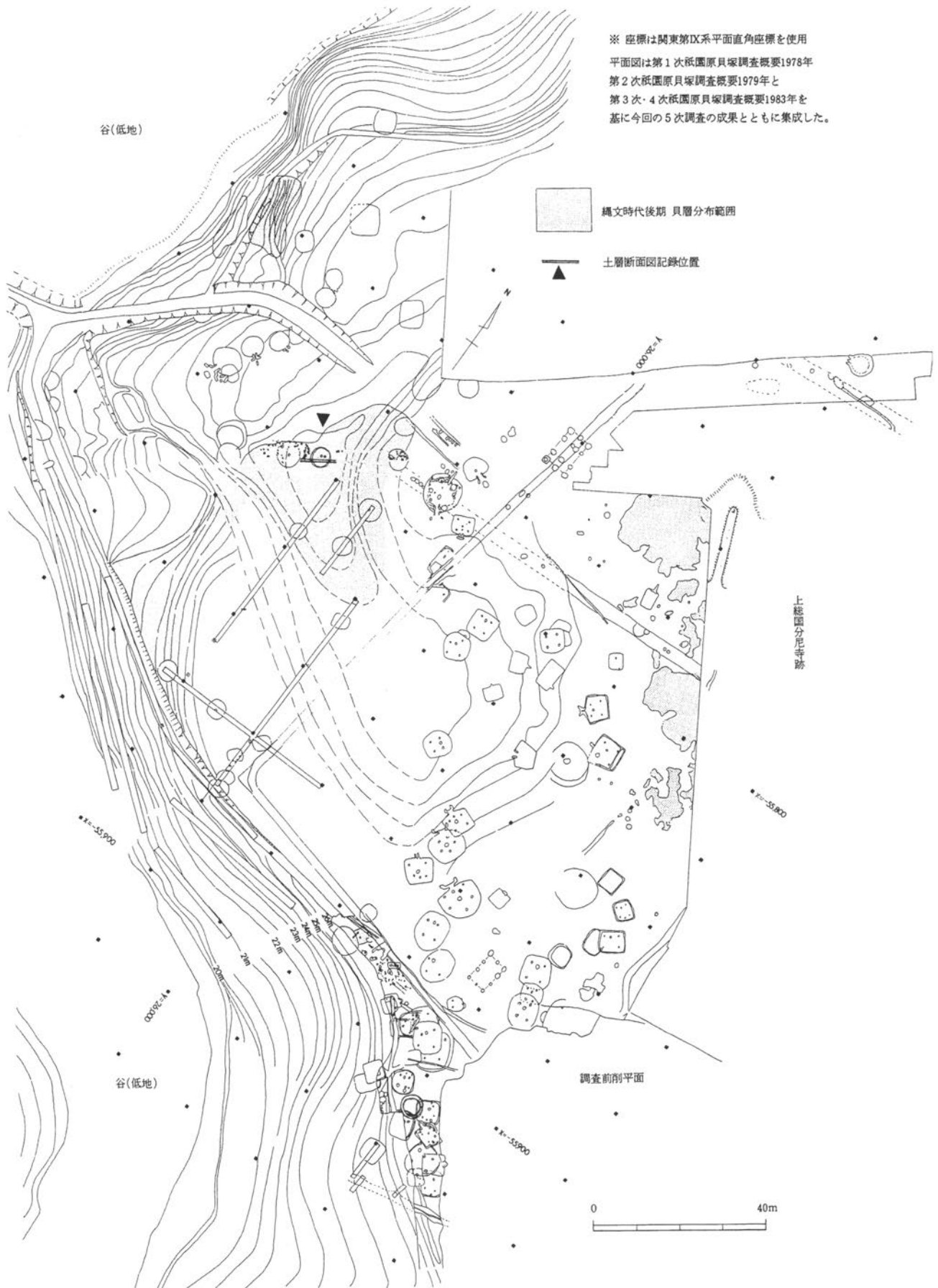
第4図 三直貝塚地形図

((財) 君津郡市文セ2002, 吉野 2003)。また、県文化財センターの調査で検出された集落内側の中央窪地は、南西側で谷に向かって開口している。遺跡の東側で、黄褐色土を主体とする縄文時代の盛土が確認され、東側や南側斜面にかけても同様の人為的な土層の堆積が確認された。丘陵平坦面上の盛土は、丘陵の肩部に沿うように弧状に分布する。北側斜面には地点貝層が分布しており、盛土の上面に堆積している。貝層はおおよそ直径60mの弧状を成し、西側斜面にかけて分布している。このほか盛土中の堀之内式期の土層中にもブロック状の貝層が認められた。土層の堆積層序は、南北の斜面でおよそ共通の様相を示している。上層から安行1式期以降の黒褐色土、加曽利B式期の黄褐色土、堀之内式期の暗褐色土が

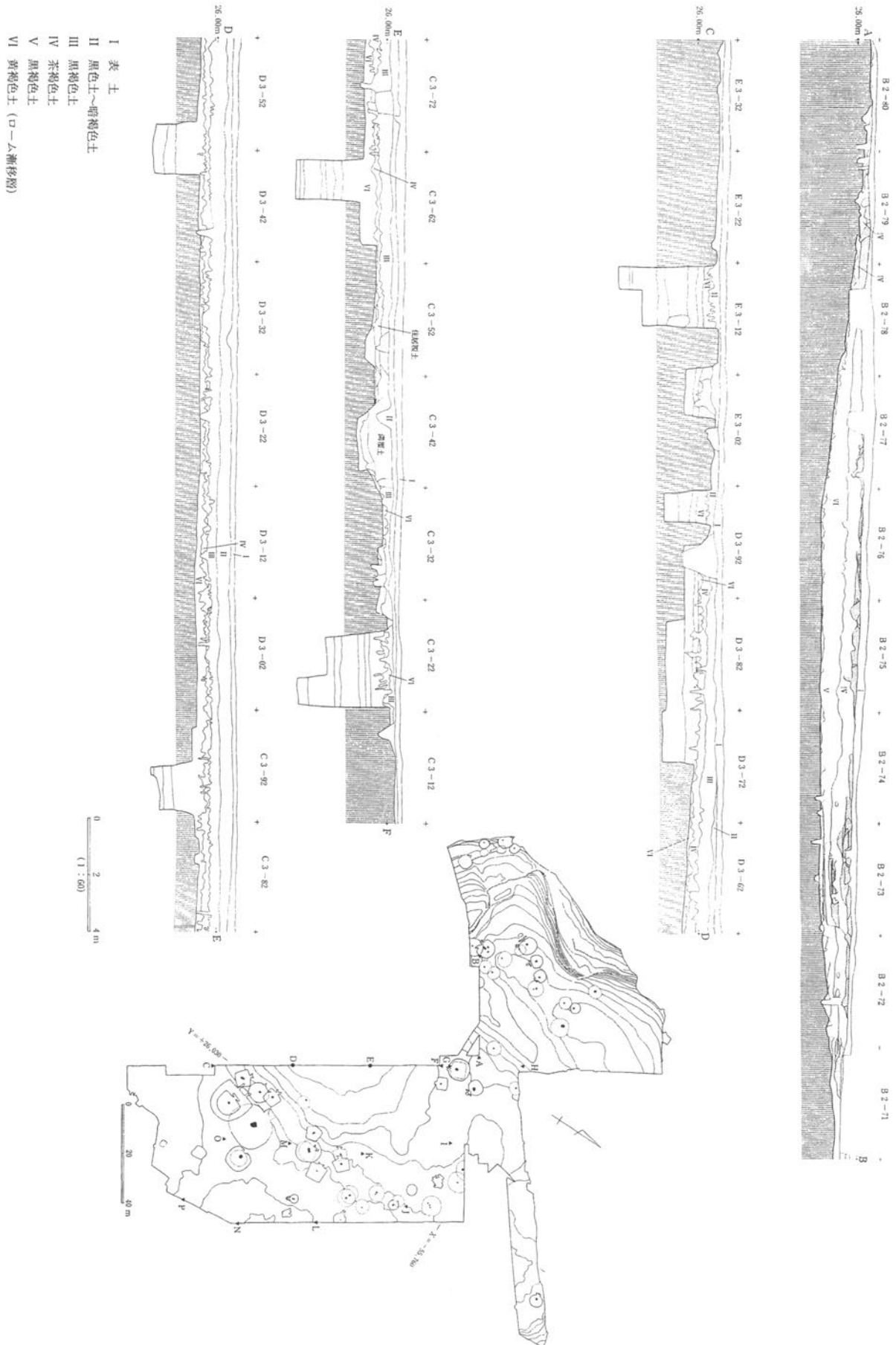
堆積し、最下層には堀之内式期以前の黒褐色土が見られる。北側斜面の貝層は黄褐色土と同じ時期に属する。東側平坦部の盛土部分では厚さ約1mのローム質土が堆積している。この土層中に炉跡が検出され、土層上面でピットが確認されることから、遺構を埋めるように重層的に堆積したことが窺える。

集落は中期加曽利E式期から形成され、丘陵平坦面上に盛土による整地面を設けながら晩期前半まで継続している。平坦面上の盛土は、堀之内式期までの竪穴住居跡を覆うようにローム土主体の土層が堆積し、黄褐色土の周囲にわずかに暗褐色土が確認できるという特徴的な検出状況を呈している。なお、盛土中に構築された加曽利B式期以降の住居跡も同様にローム土で埋められていた。集落の占地状況をみると、堀之内式期までの住居跡は東側の縁辺部から尾根状の斜面にかけて分布するのに対し、加曽利B式期以降のものは中央窪地を囲むように分布する。遺跡北側では住居のプランは確認できずにピット群が検出された。このほか窪地北側の縁辺部にピットを伴う焼土遺構が検出されている。

斜面の盛土を成す遺物包含層は厚いところで2.5mに達するが、窪地内部では遺物包含層の発達は弱く遺物量も少ない。遺構は縁辺部を除き確認されていない。ただし遺物出土状況には注意すべき所見があり、晩期の遺物が地山のハードローム層に食い込むように出土したという(吉野 2002ほか)。また地山への漸移層も検出されていないので、少なくとも晩期の時期に窪地の内部は露出した状態に保たれていたことが想定されている。また窪地内にはソフトロームが存在せず、盛土中には再堆積したソフトロームが多く確認された。盛土中に構築された遺構は、ほとんどこれらのソフトロームで埋め戻されている。なお、火山灰分析の結果、地山の立川ローム層が消失していることが確認された(吉野 2004)。



第5図 祇園原貝塚全体図



第6図 祇園原貝塚土層断面図

(3) 市原市祇園原貝塚 (第5図, 第6図)

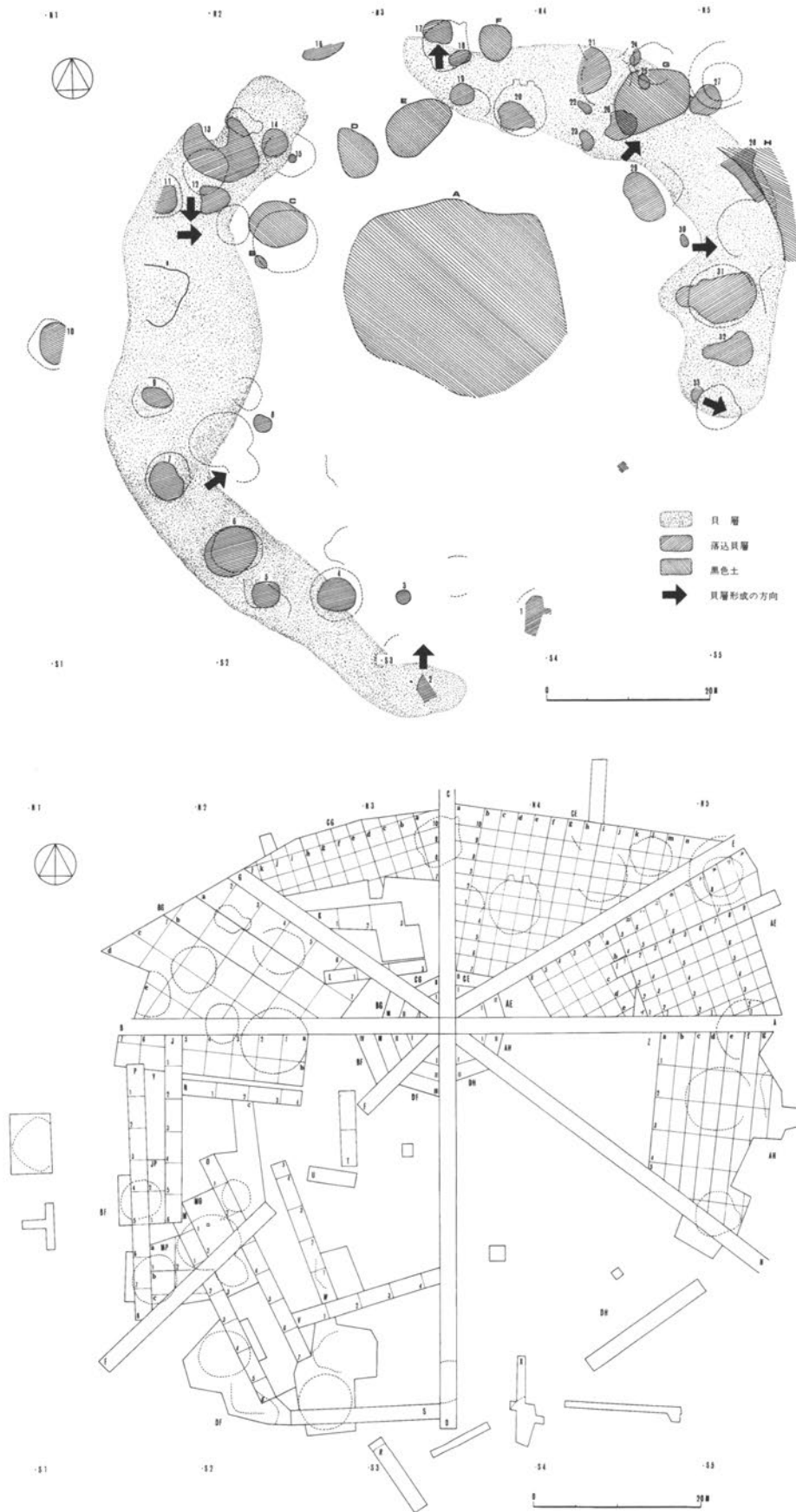
祇園原貝塚は市原市根田に所在し、養老川河口の標高27m前後の舌状台地上に立地する。市原市では昭和47年度から市庁舎周辺の土地区画整理事業に伴う発掘調査を上総国分寺台発掘調査団が実施してきたが、祇園原貝塚もその一環として昭和52年度から昭和58年度まで4次にわたる調査が行われた。また平成3年度には財団法人市原市文化財センターが公園整備に先立つ調査(第5次)を実施し(近藤1992)、現在は遺跡の一部が保存されている。第1次調査から第4次調査の本報告(忍澤1999)が近年刊行されている。

遺跡は上総国分尼寺跡に隣接することから、尼寺関連の遺構をはじめ奈良時代の集落、弥生時代の環壕集落などが混在している。遺跡の立地する台地は、西側から南西側を谷に囲まれ、中央のやや南寄りに窪地地形が存在する。縄文時代の遺構は早期から炉穴が出現するが、本格的な集落は後期初頭から晩期前葉にかけてである。貝塚は国分尼寺造成などの影響であまり遺存状況は良くないが、東側の台地上と西側の窪地内に面的貝層の堆積が認められる。窪地は遺跡中央部の北西から南西にかけて存在し、第5次調査の成果によれば、谷とは合流せず閉塞した地形であることがわかる。窪地内の基本層序は、中心部分で表土層下に黒色土層、黒褐色土層(Ⅲ層)、茶褐色土層(Ⅳ層)、黒褐色土層(Ⅴ層)が堆積し、ローム漸移層を挟んで地山に移行する。Ⅳ層の上部からⅢ層にかけて後期の貝層が含まれ、Ⅴ層から早期の撚糸文系土器を検出した(米田・小川ほか1979)。遺物包含層はⅣ層を中心に堀之内式・加曾利B式が主体となって出土している。周縁部では出土傾向が異なり、およそ後期後葉から晩期前葉を主体とする。

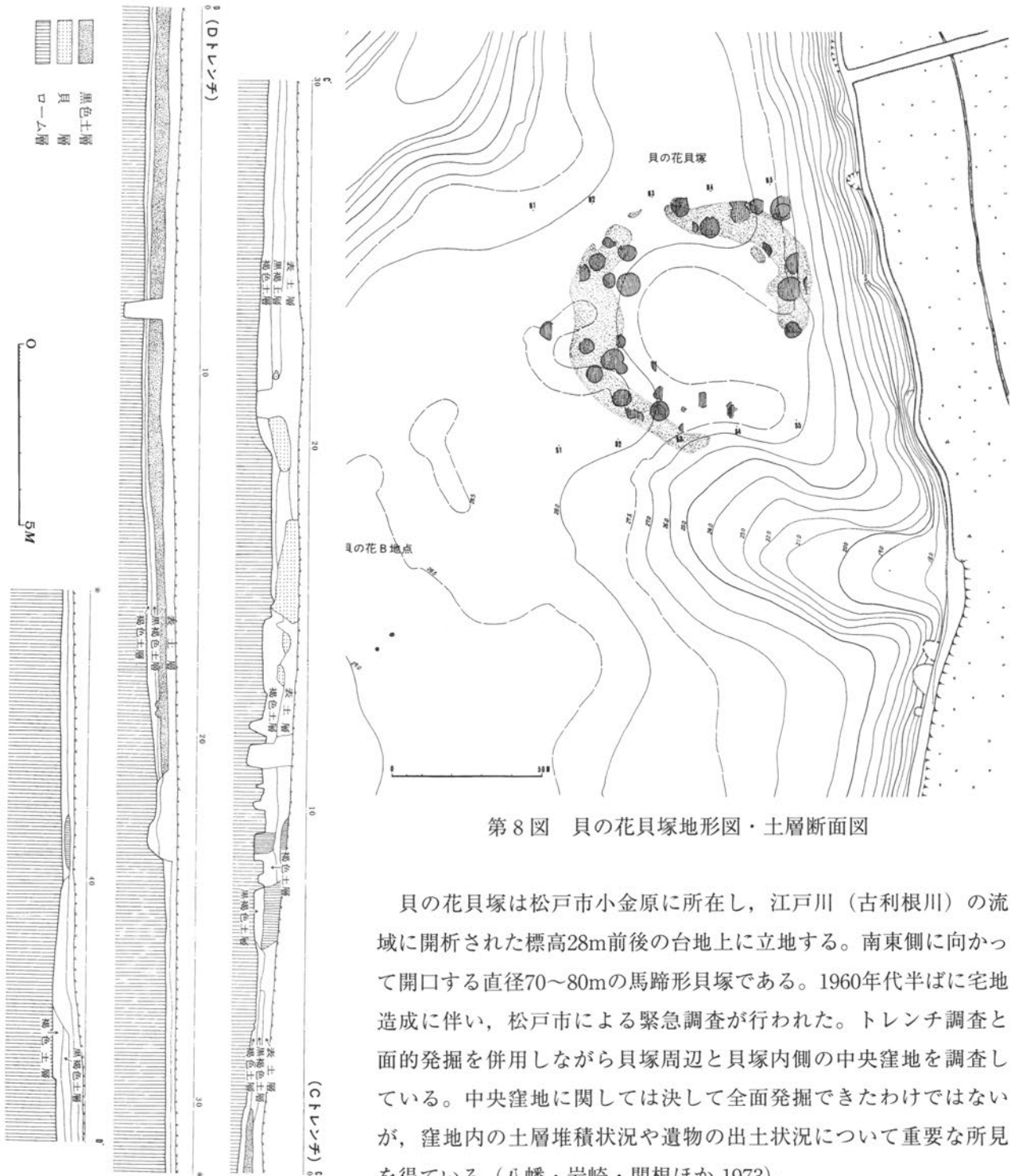
次に集落の変遷について、主に第4次までの調査成果から概観してみたい。称名寺式期には数軒の住居跡と土坑・土器棺が構築され、堀之内式期になると遺構数が増加する。住居跡や土坑のほか、埋葬人骨や貝層が検出された。この時期の遺構分布には特徴があり、北西側の斜面部に集中する傾向がある。加曾利B式期には遺構の構成は同じだが、窪地に面した台地縁辺に沿って分布するようになる。窪地内の斜面上位に占地するものも見られる。後期後半になると埋葬人骨は姿を消し、遺構数がやや減少する。遺構分布では、さらに窪地内への進出が見られ、斜面下位に構築された遺構がある。なお、土坑は群を形成する。晩期前葉には遺構数はまた減少し、分布の特徴として台地上には占地せず窪地内の斜面に展開するようになる。

第5次の調査によれば、後期の住居跡が窪地のさらに下位の斜面や中心部の低位面に確認されている。低位面では堀之内式期の貝層を伴う住居跡が検出され、この上を覆う明褐色土を間層としながらその上に加曾利B式期の面的貝層が確認された。これは前述の西側の貝層の一部である。明褐色土は新期テフラに相当するとみられ、堀之内1式と加曾利B1式の間で降下したことが特定できる。また、調査所見によれば、「その(明褐色土の)上面では谷は殆ど埋まり切っている」(近藤1993)ことから、加曾利B式期の段階ですでに窪地がある程度埋まっていたと考えられる。これは、窪地と遺構の分布関係を考える上で非常に重要な所見と言えよう。なお、第5次調査までの報告を見る限り、窪地内の地山の消失や再堆積ローム土の存在を示す記述は特に認められない。窪地の遺物包含層は、概ね後期前半から晩期前半を主体とし、出土層位はⅢ層からⅣ層に対応するとみられる。地山との間には、早期の遺物を含むⅤ層とローム漸移層が存在し、地山直上まで後・晩期の遺物が出土するような状況ではないことが窺える。

(4) 松戸市貝の花貝塚 (第7図, 第8図)



第7図 貝の花貝塚（貝層・黒色土の分布と調査区）



第8図 貝の花貝塚地形図・土層断面図

貝の花貝塚は松戸市小金原に所在し、江戸川（古利根川）の流域に開析された標高28m前後の台地上に立地する。南東側に向かって開口する直径70~80mの馬蹄形貝塚である。1960年代半ばに宅地造成に伴い、松戸市による緊急調査が行われた。トレンチ調査と面的発掘を併用しながら貝塚周辺と貝塚内側の中央窪地を調査している。中央窪地に関しては決して全面発掘できたわけではないが、窪地内の土層堆積状況や遺物の出土状況について重要な所見を得ている（八幡・岩崎・関根ほか 1973）。

遺跡の形成時期をみると、中期前半からまとまった遺物の出土がみられ、加曽利E式期には集落と貝塚の形成が始まる。貝塚は当初地点貝層で構成され、後期前半以降に連続した帯状の面状貝層に発達していった。後期前半では馬蹄形貝塚の西側を中心に広範囲な貝層が形成され、加曽利B式期になると今度は東側の貝層を形成していった。馬蹄形貝塚の内外に検出された地点貝層をしてみると、加曽利B式期までのものが約8割を占め、後期後半以降は分布範囲も限定されてくる。

土層の堆積を、中央窪地の中心部を通るC・Dトレンチで見ると、表土層から黒褐色土層、褐色土

層の順に堆積している。中央窪地内部では表土層との間に漆黒色土層が確認されている。各層の厚みは地点により異なる。貝塚部分や遺構の分布範囲においては、これに貝層や「混ローム土層」などが加わり、地点によっては基本土層の一部が確認されないところもある。

遺構としては竪穴住居跡や土坑のほか、埋葬と人骨の埋葬例も確認されている。埋葬人骨のうち約7割は後期に属する。また、単独の焼土跡が褐色土層上面ないし貝層中で検出されている。時期の特定できた34基のうち、後期前半から中葉までのものが8割弱を占める。後期末から晩期のものは、安行2式期が6基、晩期のものが中央窪地の北側に4基確認されている。このうち東側貝塚の外縁に位置する2基の焼土跡は、炉のような形状ではなく広範囲に分布し、1基から石剣が出土した。これらの焼土跡の性格は、竪穴住居の炉であったり、焚き火や祭祀関連であったり、特に後期前半のものは埋葬との関連が指摘されている。

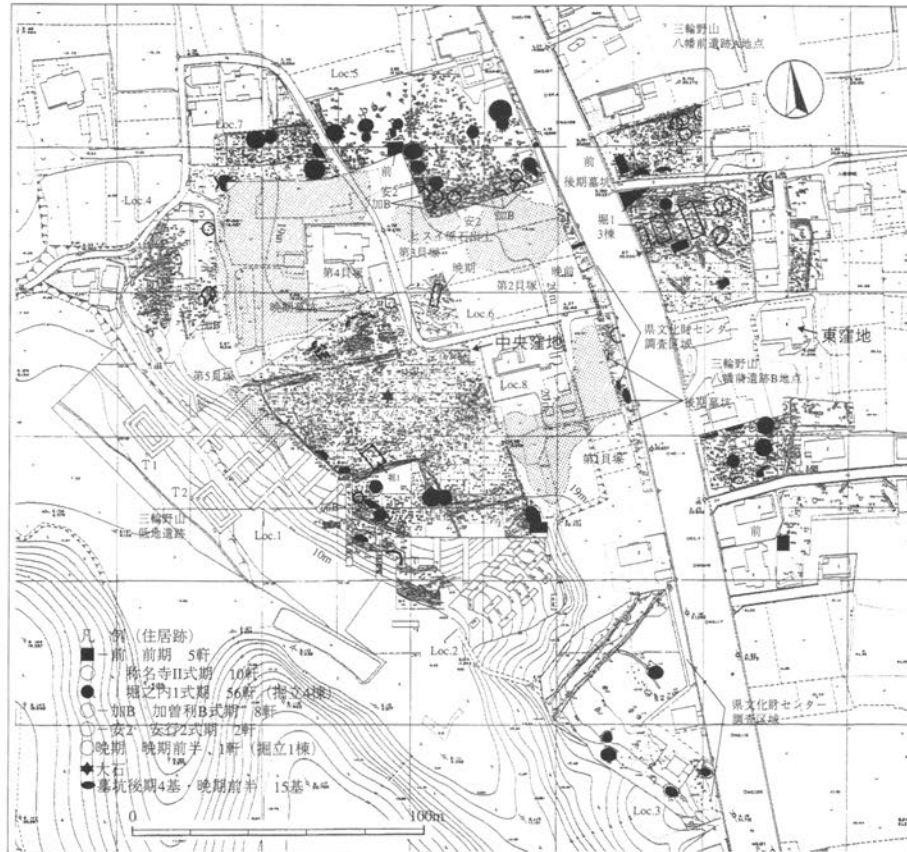
このほか特殊な遺構として「貼りローム様遺構」が報告されている。このローム土層の上面には炉跡やピットは検出できなかったことから、いわゆる貼床とは異なるものと捉えている。報告書の断面図を見た限りでは、近年三直貝塚で確認されたような住居跡の覆土とも異なるようであるが、晩期前半の一括性の高い資料を出土している点が注目される。再堆積ローム土の一種とみてよいだろう。次に、「遺構とはいいたい」としながらも、「黒色土が堆積する凹地」というものが報告されている。中央窪地の「黒色土A」を除き、多くは廃絶した遺構の窪地に堆積したものである。いずれも、後期安行式から晩期中葉までの土器がまとまって出土しており、一括性の高い資料も含まれる。「黒色土A」に関しては、北縁部でピット群が検出されたことや、先述した焼土跡の存在、「ローム面の荒れ」が指摘されている。ピット群は、後に晩期の建物である可能性も示唆された（古里 2000）。

中央窪地の遺物包含層について注意される記述がみられる。最下層の「褐色土層にはほとんどⅦ群土器（後期安行～晩期）のみが純粋に包含されて」おり、窪地の外側ではより古い様相を見せる。報告ではこの現象に対して、「晩期の（中略）土器が使用された時期に、中央部が何らかの理由によって、ローム面まで削りとられ」、「ローム層がむき出しの状態で放置されていた」と想定している。特殊遺物としては、土偶・土板・石棒・石剣などが出土しており、窪地内で土偶・土板の出土量が多い。このほか垂飾とみられる「亀の子状土製品」、石製と土製の勾玉といった遺物が含まれる。

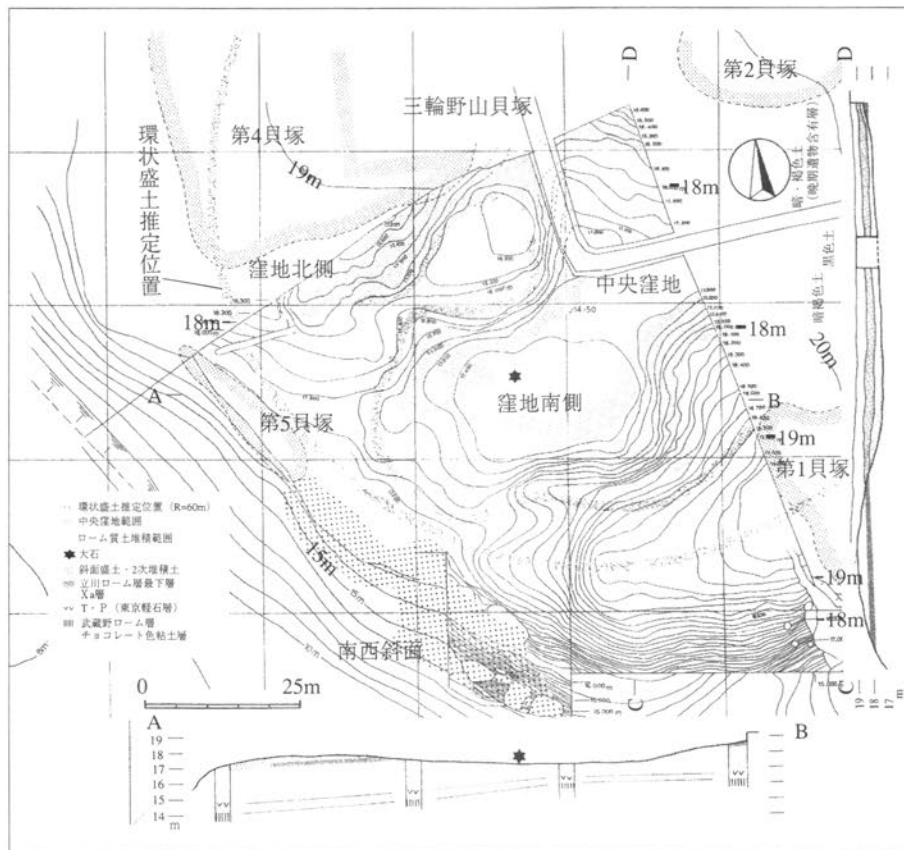
（5）流山市三輪野山貝塚（第9図、第10図）

流山市の中央部に位置し、江戸川中流域左岸の標高19m前後の台地上に立地する。平成2年から土地区画整理事業に伴い流山市教育委員会による継続的調査が行われてきた（小栗1989、流山市教委2001ほか）。その間、平成7年度から財団法人千葉県文化財センターによって道路改良事業に伴う調査も行われた（大内 2001）。県道を挟んだ向かい側は三輪野山八幡前遺跡という別遺跡になっているが、本来同一の遺跡であり、近年の遺跡紹介でも貝塚側と同列に扱われている（小栗 2000ほか）。

遺跡の形成は前期まで遡るが、本格的に集落が営まれるのは後期初頭以降である。貝塚の形状は、5つの面的貝層が東西120m、南北100mの規模で馬蹄形に連なり、南西側に開口している。貝塚の時期は後期中葉から晩期前半にあたり、後期前半には遺構内貝層が主体となる。集落は堀之内式期を主体とし、晩期前葉まで営まれている。竪穴住居跡のほか、掘立柱建物跡や墓坑群が検出された。また、ヒスイの玉生産に関連する資料の出土で注目された（小栗 1999）。



第9図 三輪野山貝塚全体図



第10図 三輪野山貝塚窪地周辺地形図

貝塚の内側には窪地地形が存在する。形状はやや複雑で、南西側の谷方向に向かって開く馬蹄形を呈している。ただし窪地自体は谷と合流するのではなく閉塞している。規模は直径80mをはかり、周囲の平坦部との比高差は1.7mに達する。窪地内の土層は概ね3層構造を成しており、表土下から暗褐色土、黒(褐)色土、暗・褐色土が確認できる。中層の黒色土には平安時代後期のテフラが含まれることから、窪地内土層で攪乱を受けていないのは下層のみと言えよう。下層の暗褐色土層ないし褐色土層は、晩期の遺物包含層となっている。褐色土層は調査時にローム質土とも呼ばれ、ソフトロームに酷似した土層である。主に窪地の斜面付近に堆積している。窪地内の地山は斜面側でV・VI層以降が消失し、底面でX層の一部までが消失している。地山ローム層の消失から、窪地は人為的に削平されたと想定している。ただし窪地地形そのものは削平以前から存在していたとも考えられている(小川・小栗 2003)。

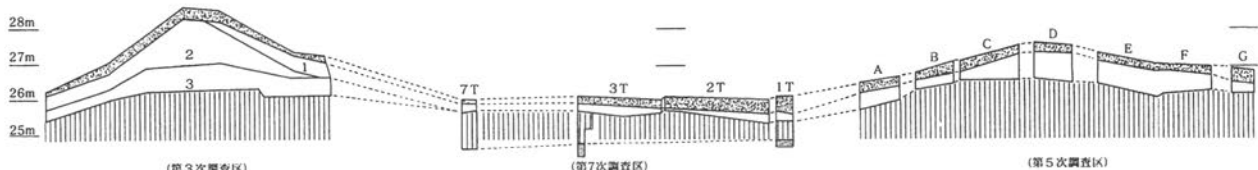
窪地内では土坑・ピット群・掘立柱建物跡・墓坑群が検出されている。分布傾向として斜面部分に多く、底面では希薄とされるが、遺構分布図を見る限り、少なくともピット群は万遍なく分布しているようにも見受けられる。このほか窪地南側の底面付近でモニュメントとみられる大石が出土し、南東部の斜面近辺に焼獣骨片の集中域が見られた。北側では晩期の墓坑が群在する。遺構の時期はほとんど晩期であるが、後期の遺構も少なからず存在する。遺物包含層の時期は、安行3 a式から安行3 d式までを主体とする。北側では若干古く、後期安行式の段階からを主体とする。このほか大洞系とともに姥山式・前浦式・荒海式を含む。安行式以前の遺物は、堀之内式が少量なのに対し、加曾利B式は多い。土器のほかに土板をはじめとする特殊遺物も多く、それらの遺物は地山直上から大量に出土した。こうした出土状況や大石の存在から中央窪地の祭祀的な利用を視野に入れている(小川・小栗 2003)。

中央窪地を調査した時点では、消失したローム層の行方が未解明だったが、斜面盛土の存在が確かめられ、窪地との関係は一定の見通しが立てられている(小栗 2004)。西側斜面では、大型土器片や焼獣骨片を大量に含む暗・黒褐色土や、ローム主体土層が検出されており、これらは斜面への盛土と考えられる。環状盛土については、すでに面状貝塚と遺物包含層の相関性からその存在が示唆されてきた(大内 2001)が、南西斜面では大量の後期遺物を含む二次堆積土層が検出され、これを平坦面の盛土(環状盛土)の痕跡と判断している。斜面盛土に含まれる遺物は後期中葉と晩期前半を主体としており、窪地の削平と盛土の形成時期を後期中葉から晩期中葉までとしている(小川・小栗 2003, 流山市教育委員会 2004)。

(6) 佐倉市井野長割遺跡(第11図)

井野長割遺跡は、佐倉市の北西部に位置し、印旛沼に注ぐ手繰川流域の標高約27mの台地上に立地する。昭和44年に市立小学校建設の際に発見され、翌年に発掘調査が実施された。このとき縄文時代の所産とみられる「マウンド状遺構」が報告され(清水ほか1971)、その後に縄文時代後・晩期以降のものであることが判明した(清水・鈴木1974)。寺野東遺跡以前の盛土‘遺構’の報告例として注目される。現在までに複数回の調査が行われているが、調査年次の数え方は第4次調査の本報告(戸谷2004)に基づいて記述する。

平成10年からは財団法人 印旛郡市文化財センターによる発掘調査が実施され、平成16年までに9度を数える。これまでの調査の結果、合計7基のマウンド状の盛土が確認され、遺跡の中央には窪地地形が確認されている。また東側の斜面には遺物包含層と大量の「ローム質黄褐色土」(以下ローム質土)が堆積し、斜面盛土を形成していた。窪地はこの東側斜面に開口した形態と言えよう。マウンド状盛土には、環



第3次調査区土層説明
 1. 暗褐色土層
 2. ローム質の褐色土層
 3. 褐色土層

表土 (一部道物包含層) 立川ローム層
 道物包含層 (一部道物包含層) 武蔵野ローム層



第11図 井野長割遺跡地形図・土層断面模式図

状に分布する大規模な一群（「外盛土」）と、その内側に位置する小規模な一群（「内盛土」）が認められる（小倉2004b）。環状に配置する盛土の内部には、斜面部と同様のローム質土が堆積している。この土層は南西側の盛土で顕著であり、表土直下まで堆積していた（清水・鈴木1974）。

遺構の検出は、マウンド状盛土の下や内部及び裾部分にはほぼ限定されており、窪地の内部ではほとんど検出されないという特徴的な傾向を示す。竪穴住居跡や土坑・ピット群のほか、貝ブロック・いわゆる土器塚などが検出されている。また、環状盛土の内側と外側を結ぶ道跡と考えられるものが2ヶ所で確認されている。遺構の時期は、後期前半から晩期前半までで、加曽利B式期から安行2式期にかけて盛期を迎える。盛土内の遺物は、集落の盛期と主体時期がほぼ一致するのに対し、東斜面のローム質土は加曽利B式・曾谷式に加えて安行3a式を主体とする（戸谷2004）。このほか中期前半から晩期後半までの遺物が出土している。

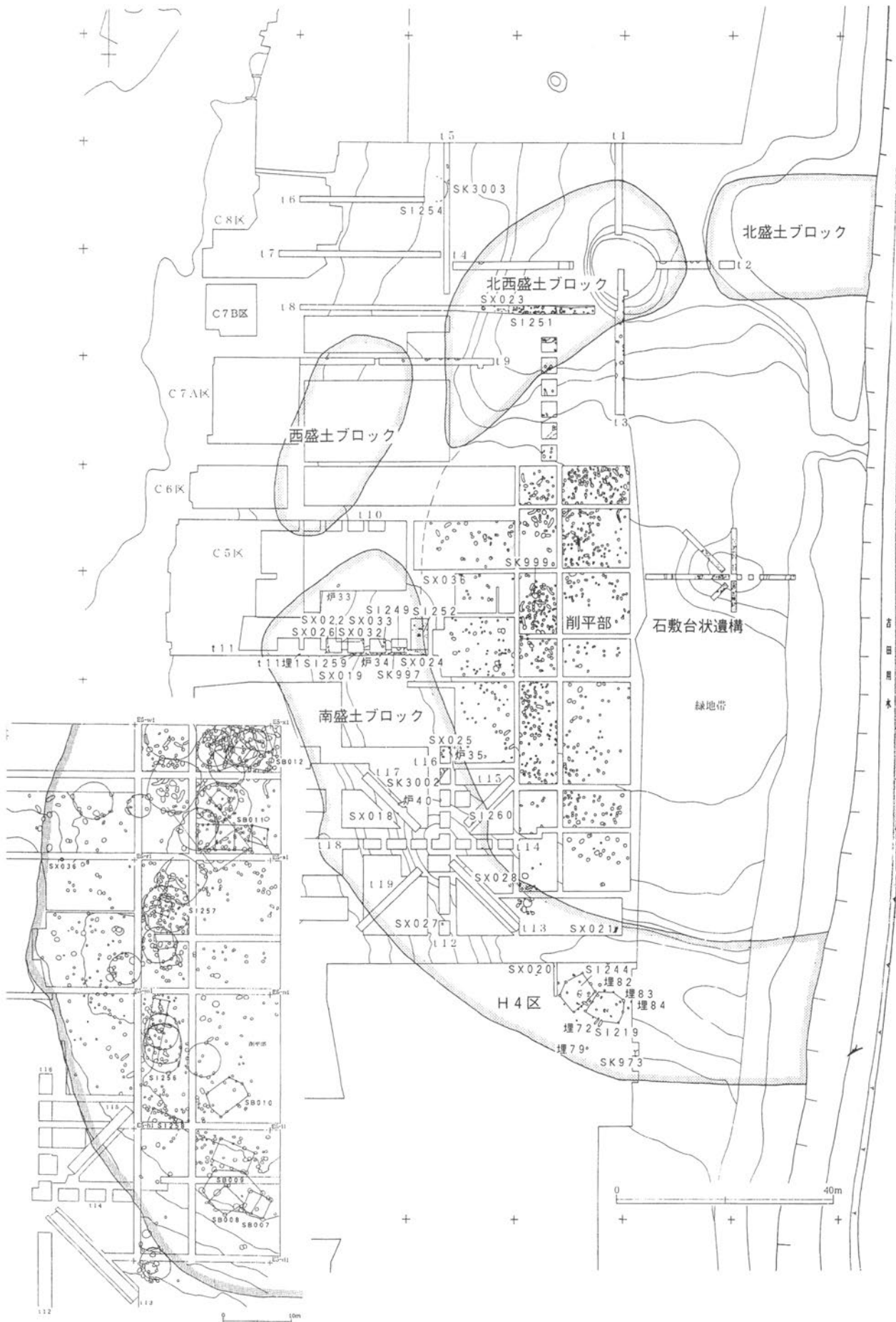
第4次調査と第7次調査の成果から窪地の様相を見てみたい。窪地内は、表土下に黒色土とローム質土が水平堆積している。層厚は、マウンド状盛土部分や斜面に比べると薄く、遺物包含層の時期も異なり、安行3b～3c式を主体とする。遺構はほとんど検出されなかった。ただし窪地の縁辺寄りでは、ローム質土を掘り込んでつくられた晩期中葉の住居跡が確認されている。また、窪地と東斜面の境界部分では、斜面の肩口から地山直近の下層に堀之内式を主体とする黒色土層が堆積し、その上に暗褐色の盛土層とローム質土層が観察された（戸谷2004）。第7次調査では中央窪地の西側にあたる範囲にトレンチが入れられ、立川ローム層の上部が失われていることが明らかになった。遺物の出土は地山直上までみられる。また窪地の一部に若干高まりを持つ部分が認められ、これが環状盛土の内側に位置する盛土（内盛土）に相当することから、地山の削り出しによる盛土裾部形成が推測されている（田中2003、小倉2004b）。

第8次調査では遺跡の西側を面的に調査した。これにより、中央の帯状の空白部分を除いて北側にピット群と南側に土坑群が検出された。北側のピット群のなかには深さが2m近いものがあり、第7次調査区でも同様なピットが確認されている。これらがほぼ一定の間隔で配置されていることや、明瞭な柱痕跡を伴うことから、建物跡と考えられる。南西側の土坑群は、楕円形の浅いものや円筒形の深いもので構成され、墓坑ないしは貯蔵穴と考えられる。これらの遺構は加曽利B式から安行2式に属する。空白部分は盛土の切れ目とも一致することから前述の道跡と考えられている（(財)印旛都市文セ2003）。

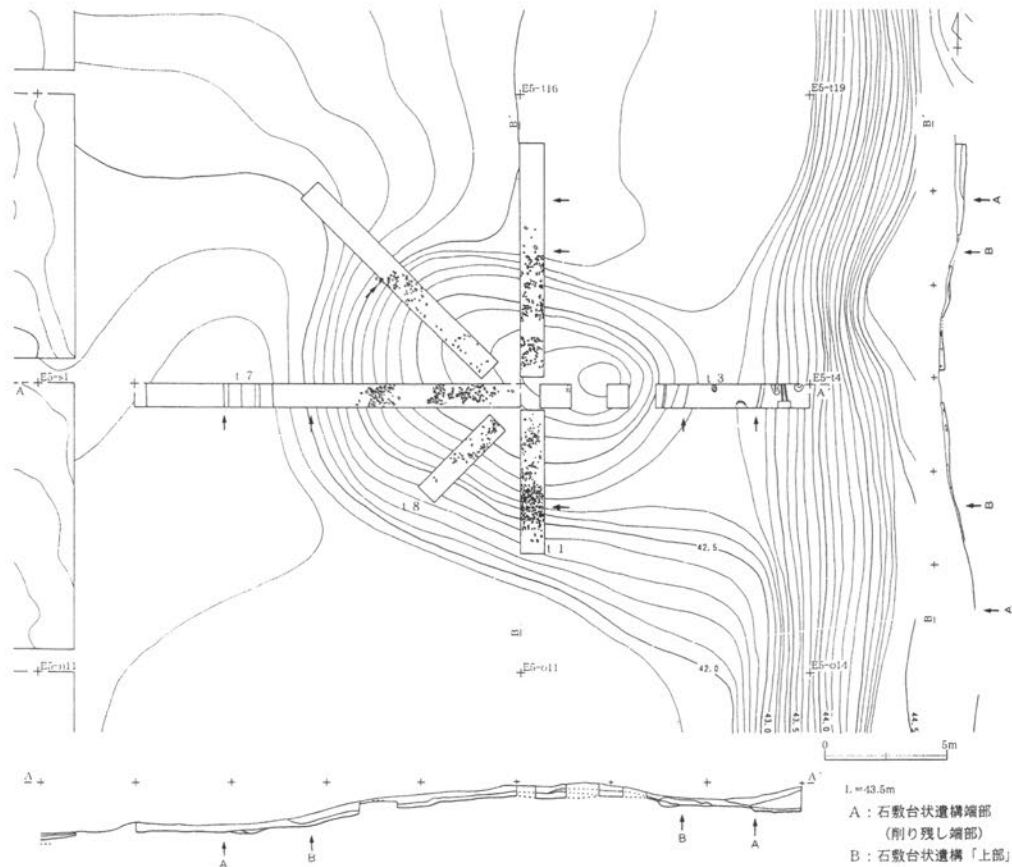
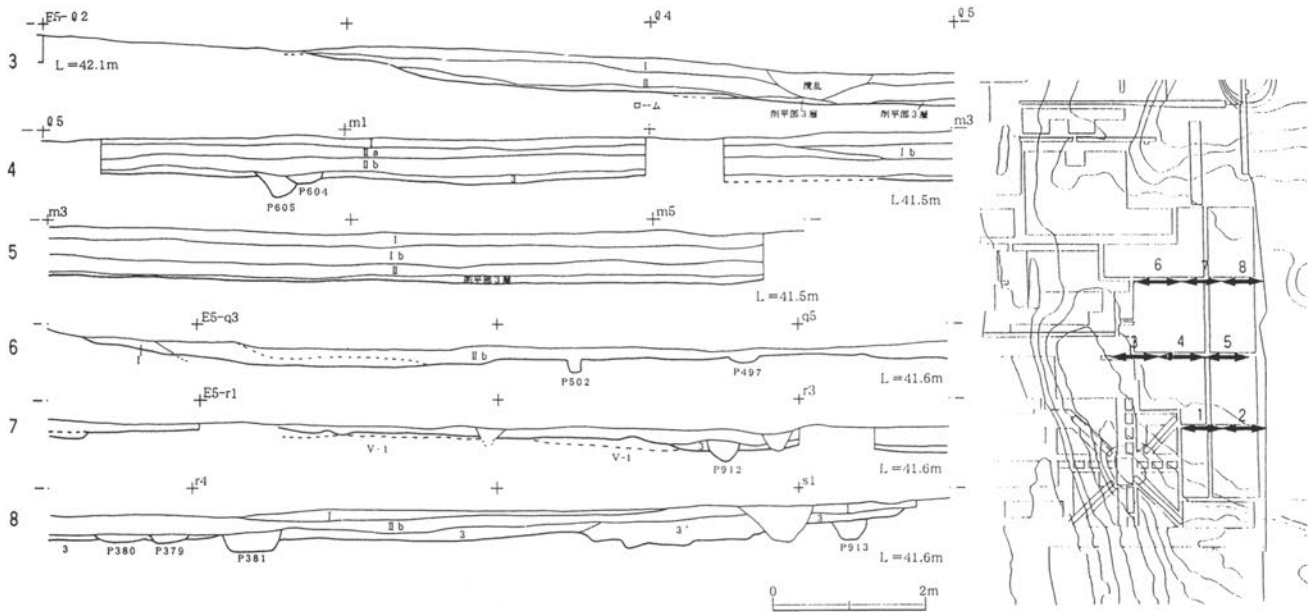
(7) 栃木県寺野東遺跡（第12図、第13図）

寺野東遺跡は、茨城県境に近い栃木県南部の小山市梁に所在し、鬼怒川支流の田川右岸に面する標高約43mの台地上に立地する。遺跡の東側は江戸時代の用水路により掘削され崖となっており、中央部には埋没谷が南北にのびている。工業団地造成に伴って、平成2年度から平成6年度まで栃木県文化振興事業団と小山市教育委員会が合同で調査を行った。当遺跡は縄文時代後・晩期集落の環状盛土遺構を初めて認識したことで著名であるが、旧石器時代から奈良・平安時代にわたる複合遺跡でもある（江原ほか1994）。

縄文時代の遺構は早期後半からみられ、集落は中期と後期の2群に分かれる。遺構の数から見れば集落の主体時期は中期と言えよう。後期の集落は調査区中央の埋没谷西側を中心に展開し、谷を挟んで対岸には環状盛土が存在する。環状盛土は主に台地平坦面上に形成され、一部は埋没谷斜面に及んでいる。この谷からは後期初頭を中心とする水場遺構が検出されている。後期前半から中葉の住居跡は、このほか環状盛土の南側にも数軒散在する。また、後期後半の住居跡が環状盛土の盛土層中に検出されている。環状盛



第12図 寺野東遺跡環状盛土遺構周辺図・窪地遺構概念図



第13図 寺野東遺跡土層断面図・石敷台状遺構

土の内側は窪地地形となっており、東側の崖面寄りに石敷台状遺構が確認された。

環状盛土の内側に存在する窪地は、K P層より以後の上部ロームが消失していることから、「削平部」と呼ばれ人為的な削平と考えられている。規模は南北約105m、東西約65mで、遺跡東側の崖面まで広が

っている。近世の地形改変により東側の本来の地形が不明なので、窪地地形が閉塞しているか開口しているかは判然としない。窪地の最低面は現地形の中央部付近とみられ、南西側端部との比高差は約1.4mとなる。現地形では、最低面付近から窪地が東側に緩やかに立ち上がるようにも見えるが、石敷台状遺構周辺が窪地の中心部とされている。同遺構の基部と窪地最低面との比高差は約0.8m～1.7mとなっている。窪地内の堆積土は3層構造を成しており、上層から茶褐色系土層・黒褐色系土層・淡褐色系土層に分かれる。このうち中層までは古墳時代以降の堆積で、下層のみがプライマリーな晩期遺物包含層である。出土遺物は晩期前半から中葉を主体とするが、堀之内式も少なからず出土している。層位的には、遺物包含層の下層を中心に地山直上まで分布している（江原ほか 1997）。

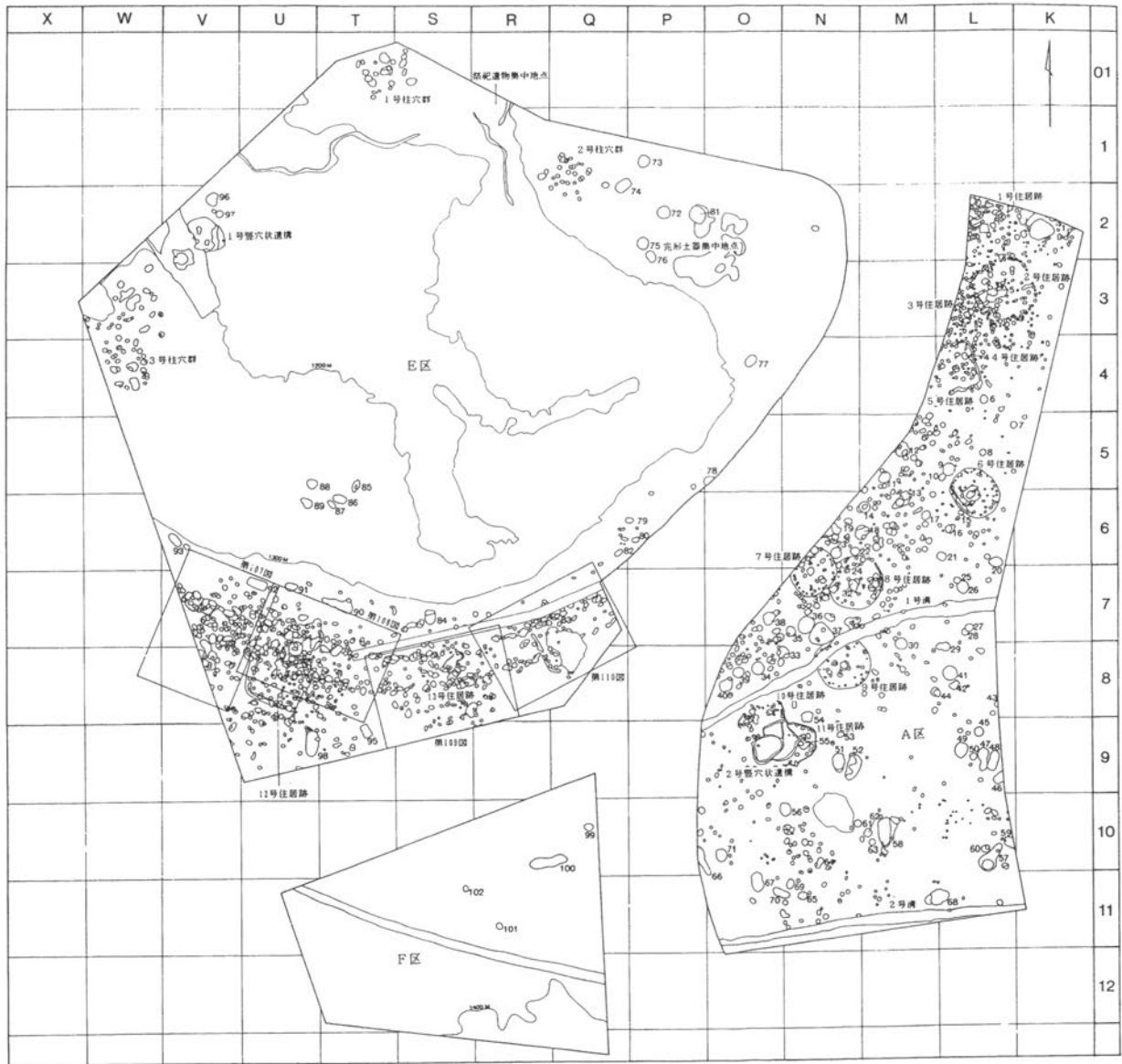
窪地の西側半分を平面的に調査した結果、ピット群や土坑が窪地内に分布していることが明らかとなった。多数のピットの内いくつかは、住居跡5軒と掘立柱建物跡8棟に復元された。このほか土器埋設土坑がある。これらの遺構は、盛土内側のラインに沿うように集中して分布し、中央部付近にいくほど希薄になる傾向があった。遺構の時期は概ね晩期中葉に属する。なお、特殊な遺構として確認されていた石敷台状遺構は、もともと高かった地山を削り出して塚状に整形し、ローム直上の暗褐色土を礫で覆ったものである。遺物は盛土遺構や窪地部分と比べて非常に僅少であることから、集中廃棄の場とされなかった場所として評価されている。出土土器は小破片ばかりで遺構の時期も判然としないが、およそ窪地の出土傾向と一致するらしい。

平坦面の環状盛土は、後期初頭以前の遺構覆土かローム漸移層の上に堆積している。地点により土層の違いが認められるが、概ね褐色土（3層）・暗褐色土（6層）・暗茶褐色土（8層）を基本とし、これに黒色土等が加わる。基本の土層はすべてローム質土であり、3層は特に均質性が強く、鹿沼軽石を多量に含む地点もある。8層には骨と炭化物が多量に含まれる。環状盛土南部の平面調査の結果、盛土下から後期初頭以前の遺構が密集して検出された。なお、水場遺構の検出された西側谷の堆積土には、ローム土を主体とする土層は確認されていない。

（8）埼玉県赤城遺跡（第14図、第15図）

赤城遺跡は埼玉県北埼玉郡川里村に所在する。県の北西部に位置し、加須低地の一角を占める。加須低地には大宮台地からつながるローム台地が沖積土の下に埋没している状況がみられ、当遺跡もこうした埋没ローム台地に立地する。工業団地造成に伴い、昭和60年より2年度にわたって埼玉県埋蔵文化財調査事業団により調査された（新屋ほか 1988）。これに先立ち、川里村教育委員会によっても発掘調査が実施されている。事業団の発掘区は便宜上A区からF区の6区に分けられ、隣接する発掘区どうしのまとまりが南北2地点に分離している。

集落は中期の勝坂・阿玉台式期から形成され、晩期中葉まで営まれた。集落の時期は南北2地点で異なり、南側地点のB・C・D区では微高地上に後期前半までの遺構が分布し、その後は途絶える。一方標高の低い北側のA・E・F区では、後期中葉から晩期中葉に集落の盛期を迎える。A・E・F区は変化に富む地形を成しており、E区の窪地地形とA区からつづく台地部分およびこの間に見られる平坦部と微高地からなっている。窪地低位面と台地平坦面との比高差は2～3mに達する。遺構は台地縁辺部に弧状に集中して分布し、台地南東側にもやや多く見られる。また、窪地の斜面とさらに低位面からも遺構が検出されている点が注目される。窪地内外で検出された遺構は、加曾利B式期から晩期安行期に属するもので、



第14図 赤城遺跡北側調査区全体図 (S = 1/800)

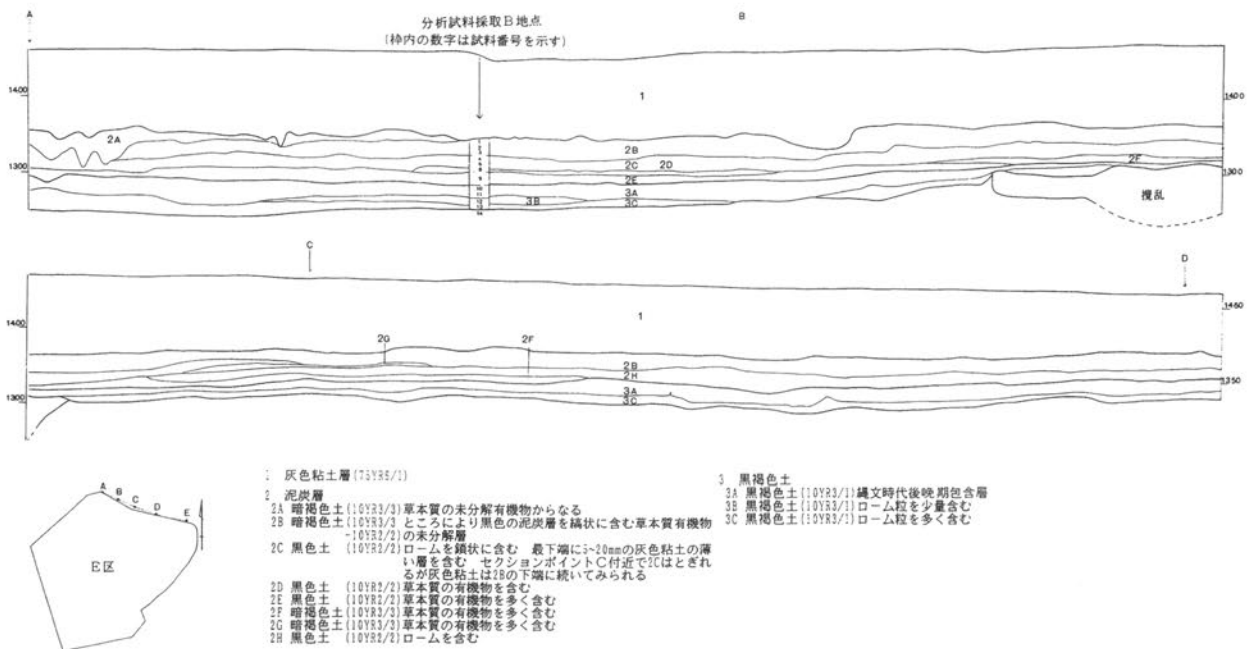
住居跡・土坑・柱穴群・竪穴状遺構・完形土器集中地点・祭祀遺物集中地点が確認されている。

窪地周辺の土層堆積は、上位から灰色粘土層、泥炭層、黒褐色土層となっており、下層の黒褐色土層はさらに3層に分層できる。細分した3層のうち上層は後・晩期遺物包含層である。中層以下にはローム粒が含まれ、下層での含有量が多い。テフラ分析の成果によると、黒褐色土にはA T存在の可能性が指摘され、二次堆積の立川ロームであることが推定されている。

窪地内の遺構について見てみたい。低位面には竪穴状遺構が1基検出された。溝と隣接し、木材や杭が出土している。時期は安行1式とされる。木の実も少量出土した。報告のなかで具体的な用途までは言及されていないが、水を利用した遺構であることが想定されているので、水場遺構の一種と捉えていいのではないだろうか。なお、この遺構に近接して加曾利B式期の土坑が2基検出されている。次に台地縁辺との間の斜面には、柱穴群2カ所・土坑5基・祭祀遺物集中地点1カ所が検出された。柱穴群は、明瞭なブ

ランを持たないものの、おおよそ方形や楕円形を基調としたプランを示すもので、台地平坦面でも1カ所みつかっている。斜面部のものは、低位面を挟んで対峙するように存在し、時期は晩期安行である。土坑は5基が群在している。浅い皿状の形態で、1基は安行3a式のほぼ完形土器1個体を出土した。祭祀遺物集中地点は、当初礫の集中として調査していたもので、礫の下から土偶・石棒・石剣類が多数出土した。出土層位は黒褐色土中である。断面図を見ると地山からやや浮いた位置での出土状態が観察できる。なお焼土などの特別な含有物は含まれていなかった。

報告をみる限り、窪地内の黒褐色土にローム粒を含むという表現はあるが、台地平坦面を含め、再堆積のローム土が多量に存在するような記述は特に見受けられない。またテフラ分析の結果からも、崩落した立川ロームの自然堆積が想定されている。



第15図 赤城遺跡土層断面図 (S = 1/100)

4. 事例の類型化と検討

では、これまでみてきた事例について、各遺跡ごとに評価を行い、中央窪地が形成された経緯を推定してみたい。ただし集落が形成される以前のものとの自然地形がどうであったのか検証が困難であるため、ここでは最終形態としての窪地を対象とする。分析に際して、窪地の形成に関わる視点からいくつかの分析項目を設定してみた(表1)。この項目にもとづいて各事例を比較し、類型化を試みる。まず、設定した分析項目の説明を行い、各遺跡を評価した後に分析項目に沿ってまとめてみる。最後に問題点や課題についても若干指摘しておきたい。

1) 分析項目について

窪地の形態：窪地の地形的な形状について分類してみた。貝の花貝塚・三輪野山貝塚は、窪地が台地上で閉じた典型的な「閉塞型」である。これに対して窪地が埋没谷と繋がる三直貝塚・井野長割遺跡を「開

表1 対象遺跡窪地属性表

遺跡名	上宮田台遺跡	三直貝塚	祇園原貝塚	貝の花貝塚	三輪野山貝塚	井野長割遺跡	寺野東遺跡	赤城遺跡
窪地の形態	合流	開口	閉塞	閉塞	閉塞	開口	不明	開口？
地山の状況 一部消失 遺存	○	○	○	(○)	○	○	○	○
再堆積ローム	斜面盛土 (平坦面盛土)	環状盛土 斜面盛土	無し	貼りローム様 遺構	(環状盛土) 斜面盛土	マンウド状盛 土 斜面盛土	環状盛土	無し
遺物出土状況	地山直上	地山直上	間層介在	地山直上	地山直上	地山直上	地山直上	間層介在
遺構分布状況	ほぼ全面分布	ほとんど無し	周縁部に多い	周縁部	周縁部に多い	ほとんど無し	周縁部に集中	散在
周縁部	住居跡多数・ 土坑群在	焼土遺構・ピ ット	住居跡やや多 い	ピット群・焼 土	掘立柱建物 跡・墓坑	住居跡	住居跡・土坑・掘立 柱建物跡・ピット群	ピット群・土坑・ 祭祀遺物集中
中心部	ピット群・住 居跡	無し	住居跡・貝層	不明	大石・ピット 群	無し	石敷台状遺構	竪穴遺構・土 坑
特殊遺構	(無し)	焼土遺構	無し	無し	大石	無し	石敷台状遺構	竪穴遺構(水 場遺構?) 祭祀遺物集中
窪地形成の 経緯想定	人為的削平	人為的維持	自然地形	人為的維持	人為的削平	人為的削平	人為的削平	自然地形

口型」とする。上宮田台遺跡は、谷と繋がりながらも斜面の手前で一度閉じかける地形なので、中間的な性格の「合流型」とした。ここで分類した地形の差は、窪地から土砂が流出する可能性の程度に影響するものと考えられる。「開口型」窪地の場合、谷側の斜面に再堆積ローム土が検出されても、自然流出の可能性が否定できないので、それがただちに人為的な盛土か判断できないと思われる。

地山の状況：窪地内の地山がプライマリーに存在するかどうかで区別した。環状盛土を伴う後・晩期遺跡の多くで、ローム層上部の消失が報告されている。貝の花貝塚で指摘された「ローム面の荒れ」も表層の消失ととらえてよいと思う。こうした例も含めて「一部消失型」としたい。これに対して祇園原貝塚・赤城遺跡では特に地山の消失を示すデータは報告されていない。消極的な理由ながら「遺存型」とする。窪地という地形が存在する以上、窪地の内部と外部にレベル差があるのは当然であるが、その差がローム層堆積以降に生じたものなのか、次項の再堆積ローム土の存在と密接に関わってこよう。

再堆積ローム：窪地の周囲に再堆積のローム土が存在するか、また存在する場合の形態について分類してみた。再堆積とは必ずしも人為的な盛土のみに限定されるものではないが、現状では区別できる例が乏しいため、自然堆積の可能性も含めて「盛土」に統一した。存在する例として、台地ないし丘陵平坦面上に大規模に堆積したものがいわゆる環状盛土と言えよう。盛土は、ローム土とともに遺物を多量に含む暗褐色土などで構成され、三直貝塚・井野長割遺跡では特にローム土の堆積が目立った。一方斜面にも同様な遺物を含むローム土が観察される例が報告されており、上宮田台遺跡・井野長割遺跡などで顕著である。再堆積ロームの存在は、先の窪地内地山の消失と合わせて、ローム土の移動を想定する根拠となる。さらにはどのようなかたちで堆積しているかによって、人為的営為の介在が浮上してくる。

遺物出土状況：窪地内に形成された遺物包含層について、遺物が窪地内の地山直上まで出土する「地山直上型」と、後・晩期遺物包含層と地山との間に間層が存在する「間層介在型」に分けた。前者の場合、遺物包含層の時期は集落の最終段階に近い晩期を主体としている。後者の間層は、遺物をほとんど含まないか、集落の前段階の遺物を含む。

遺構分布状況：窪地内の遺構分布に関して、概況を示すとともに、周縁部（斜面部）と中心部（低位面）に分けて考えた。また、通常の住居跡や土坑・ピットなどとは異なる特殊な遺構の有無を比較した。ただし祭祀遺物の集中については、どの程度の内容で認定するか難しい面を持つ。また後・晩期集落にとって、土偶・土板・石棒などの祭祀的とされる遺物が、果たして特殊であったのかという根本的な問題もあろう。ここでは祭祀的な行為の痕跡を通常的生活痕跡と区別して取り上げてみた。なお、赤城遺跡の竪穴遺構は祭祀とは関連ないであろうが、水を利用しやすい立地の特殊性によるものと思われる。

2) 各事例の評価

上宮田台遺跡：南北に長い窪地地形を有する。窪地の北側が一部谷と繋がるので合流型とした。窪地の内部には明瞭に住居跡等の遺構が分布し、地山は立川ローム層の上部が消失している。北側の斜面で再堆積ローム土を検出した。ローム土は黒色土系の間層を含まず厚く堆積し、地山との間にも間層を挟まない。また窪地の西側平坦部では再堆積のローム質土が確認され、盛土の可能性も考えられる。窪地内の遺構は後期が主体だが、最下層の遺物包含層は晩期を主体とする。晩期包含層は後期の遺構を覆うように堆積し、遺物の出土状況は地山直上型である。後期の住居跡の壁面は残っていない。遺構の分布状況を見ると、後期前半では現状の窪地を意識した配置にはなっていないようである。以上の点から見て、窪地の最終形態は後期の集落を削平して人為的につくられた可能性が高い。北側斜面のローム土のあり方も短期間の堆積を裏付けるものであろう。

三直貝塚：竪穴住居跡を埋め戻した再堆積ローム土の存在が特徴的である。丘陵の平坦部に存在する環状盛土には住居跡が重層的に構築され、その覆土はソフトローム主体の黄褐色土がほとんどを占めている。斜面部の盛土にも同種のローム土が含まれる。これらのローム土の供給元として、中央窪地が候補に挙がるだろう。窪地内の地山は、立川ロームが消失していることが判明しているが、人為的な削平があったかについては定かでない。ただし遺物が地山直上型で出土する状況から、少なくとも地山を露出した状態が人為的に維持されていたことが考えられる。斜面のローム土のあり方は、自然流出という要因も考えられるが、住居跡を埋めたローム土の堆積は人為的にとらえるのが合理的であろう。また、窪地内にはほとんど遺構が確認できないことから、ある程度継続的に広場としての意識が働いていた可能性がある。地形的には開口型とみられる。

祇園原貝塚：閉塞した中央窪地を有する。他の遺跡で地山直上に晩期の遺物包含層が確認されるのに対し、この遺跡では遺跡形成の初期段階にあたる早期の遺物が最下層の黒褐色土から出土している。この土層下にさらにローム漸移層を挟んで地山に移行する。後期以降の遺物包含層は中層以上に堆積しているので間層介在型とした。その土層中に遺構や貝塚が検出されており、集落が盛期を迎える後期には既に窪地はある程度埋まっていたことがわかる。地山の消失や再堆積ローム土の存在は特に報告されていない。これらの点からは、窪地の形成に人為的な作用を想定するのは難しく、自然地形と考えたほうが合理的であろう。なお、窪地の中心部寄りでは後期中葉までの遺物が多いのに対し、周縁部では後期後葉から晩期を主体とする。これは遺構の分布状況に対応していると考えられよう。

貝の花貝塚：環状貝塚の内側に閉塞した窪地地形が存在する。窪地内の地山の遺存状況が不明であるものの、「ローム面の荒れ」が観察されることから、少なくとも地山の表層部が消失しているとみてよい。再堆積ロームについては、断面図にも明瞭なローム質土の記載はなく、「貼りローム様遺構」とされるものが相当する。また地山直上に後・晩期の遺物包含層が堆積しており、三直貝塚と同様に地山を人為的に

露出させていたと考えられる。一方で最下層の遺物包含層の上面に焼土跡が検出されており、焼土の性格は不明なものが多いが、窪地周縁部での整地面の存在が窺える。中心部の詳細が不明なことなどから削平は定かではないが、地山面露出の人為的維持と捉えておきたい。

三輪野山貝塚：やや複雑な形状の閉塞した窪地地形を持つ。窪地内の地山は底面で立川ロームX層上部まで消失している。窪地の斜面にはソフトロームに酷似した褐色土が堆積し、中心部最下層の暗褐色土とともに晩期遺物包含層を形成している。遺物の出土状況は地山直上型である。土偶・土板などの特殊遺物も多く含まれる。褐色土は再堆積ロームの一種と考えられ、これ以外にも西側斜面で盛土を構成するローム主体土層が検出された。遺構は窪地周縁部に多く、掘立柱建物跡や墓坑群が検出されている。これらの遺構の時期は晩期を主体とするが、後期の遺構も存在する。中心部はピット群主体で、モニュメントとみられる大石が1点出土した。平坦面の環状盛土も本来は存在していたことが推定されている。地山の一部消失から人為的削平が想定されているが、再堆積ローム土の存在と遺物出土状況からも裏付けることができよう。なお、中心部で出土した大石が意図的な配置による遺構であれば、特殊遺物の多さも考慮すると祭祀的行為が考えられる。

井野長割遺跡：平坦面上のマウンド状盛土と東側斜面に再堆積ローム土が多量に堆積している。窪地地形は開口しているようだが、斜面側付近の地山に立ち上がりが見られ、直接谷に繋がるわけではないらしい。盛土下の地形が不明なので開口型としておく。窪地内には黒色土とローム質土から成る晩期の遺物包含層が堆積しており、出土状況は地山直上型である。地山は立川ローム層上部が消失している。窪地内に存在する「内盛土」の一部は、裾部分を地山の削り出して成形した可能性が高い。マウンド状盛土内のローム質土は表土近くまで厚く堆積している箇所がある。地山の一部消失とローム質土のあり方、および遺物出土状況から、人為的な削平が考えられる。「内盛土」の地山残存も有力な根拠と考える。また遺構の分布が盛土部分に限られ、窪地内にほとんど存在しない点も考慮に値する。

寺野東遺跡：台地平坦面上にローム質土を中心に構成される環状盛土が存在する。盛土の内側は窪地地形になっており、地山はK P層以後の上部ロームが消失している。窪地は西側では閉じているようだが、東側は近世の地形改変でもとの地形がわからない。窪地内部には晩期の遺物包含層が堆積し、出土状況は地山直上型である。遺構は窪地周縁部に偏在し、ピット群・土坑・住居跡・掘立柱建物跡などが検出されている。中央部付近にいくほど遺構は希薄になり、中心部には地山を削り出して成形したとみられる石敷き台状遺構が存在する。窪地の遺構は晩期を主体とし、窪地を囲む環状盛土の下に後期初頭以前の遺構が密集していたのとは対照的である。以上、盛土内に含まれる多量の再堆積ロームと、窪地内地山の一部消失に合わせて、石敷き台状遺構の裾に地山が遺存していることから、報告でも「削平部」と表現されたように人為的な削平が考えられる。盛土部分と窪地で遺構の時期がまったく異なる点も示唆的である。

赤城遺跡：開口型と思われる窪地が存在する。地山は遺存型とみられ、明確な再堆積ローム土は検出されていない。テフラ分析により窪地内の包含層へのA Tの混入が示唆されているが、あくまでも自然崩落を想定したものである。窪地外側の台地縁辺部で遺構の集中が見られ、内部にも遺構が低位部分まで散在している。地山の上に堆積した黒褐色土の上部が後・晩期遺物包含層になっているが、地山直上まで遺物が出土するような様相ではない。ローム台地が沖積土に埋没する加須低地特有の立地条件からか、窪地の中心付近に水場遺構らしき竪穴遺構が検出されている。窪地内の遺構は集落の時期とほぼ一致するようだが、やや晩期の遺構も目立つ。以上の点から窪地は自然地形と考えられる。

3) まとめ

まず、窪地の地形的形状による分類は、これ自体では窪地の成因を特定する根拠にはならないであろう。というのも、これまで指摘されきたように窪地地形は関東地方のローム台地に広く分布する自然地形であるからで、むしろ窪地内外の土層の移動が焦点となつてこよう。ただし、開口型は閉塞型よりも自然堆積の可能性を高く有していると言えよう。そこで地山の状況であるが、窪地内部の地山が一部消失していることは、多くの遺跡で人為的な営為を窺わせる有力な要素と考えられてきた。しかし浸食作用による自然流出が存在するのも確かであろう。すると次に問題になるのは、消失した地山の行方である。これは黄褐色土、つまり再堆積したローム土の存在が指標になってこよう。

これまで見てきた事例では、盛土とされるローム土が台地（ないし丘陵）平坦面上や谷側の斜面に堆積していた。平坦面上に存在する盛土の代表的なものは、いわゆる環状盛土である。堆積状況はさまざまだが、後期の遺物を多量に含む点や地山との間に間層を挟んで堆積している点が共通する。盛土は、寺野東遺跡ではほとんどローム質土で構成され、井野長割遺跡では地点により暗褐色土が卓越する。三直貝塚ではローム質土で遺構が埋め立てられていた。井野長割遺跡ではまた、環状盛土の上部にまでローム土が堆積する箇所も認められた。こうした堆積状況に対して、自然の営為でどのように説明できるのだろうか。これについては人為的な作用を想定したほうがより合理的ではないかと考える。一方、谷側の斜面に再堆積ロームが検出されても、自然堆積土の上に崩落したローム土が堆積することも十分考えられる。窪地の形態が開口型の場合、こうした傾向も強いであろう。今後は、自然の作用で窪地が形成される過程を改めて検証していくことも肝要であろう。

次に、遺物包含層の層位的な出土状況に着目すると、地山直上型は下層ほど晩期を主体とし、上層ほど後期の割合が高くなる傾向がある。これに対して間層介在型にした祇園原貝塚では、最下層の黒褐色土層に早期の遺物が含まれ、その上の茶褐色土層から後・晩期の遺物と貝層を検出した。両者を比較した場合、地層累重の法則から言っても、前者は層位の逆転を起こしており、後者は順当な堆積を示している。このことから、地山直上型は包含層形成時に層位の攪乱が予想され、間層介在型は、自然堆積に伴って包含層が形成されたと解釈できよう。ここで地山の状況との関連を確認すると、地山直上型の遺跡ではすべて地山の一部消失が確認され、間層介在型では逆に地山が遺存していると考えられた。今回検討した遺跡を見る限り、地山の状況と遺物の出土状況には相関性があると思われる。また再堆積ロームについても同様で、間層介在型では地山の消失が特に認められないのであるから、再堆積ロームが検出されないのも当然の結果ではあるだろう。

ここまでは主に土層の堆積に関する視点からの分析であるが、さらに遺構分布との関わりを見ておきたい。まず窪地全体としてみた場合、窪地内に遺構が存在する事例とほとんど存在しない事例の2者に分けられる。そして両者とも、分布状況には、窪地周縁部の緩斜面に偏在する傾向が明らかに認められる。寺野東遺跡をはじめ、祇園原貝塚でも比較的顕著である。また窪地の外縁部も含めれば、赤城遺跡にも同様な偏在傾向があると言えよう。また三直貝塚・井野長割遺跡の場合、窪地内で遺構を検出したのは周縁部のみであり、外側の盛土部分との対比が顕著である。貝の花貝塚のピット群や焼土跡も周縁部での検出であった。三輪野山貝塚でも、傾向として掘立柱建物跡・土坑墓などの主要な遺構が周縁部に偏る傾向は認められる。上宮田台遺跡は、他の遺跡に比べて偏在傾向が弱いと思われるが、それでも住居跡の分布には偏りがみられる。また検出された住居跡はごく一部を除き壁面が残っていなかった。なお井野長割遺跡で

は、遺構とすべきかは別にして、マウンド状盛土の小規模な一群（「内盛土」）が存在する。

周縁部に見られる遺構には、竪穴住居跡（壁面が遺存しないものを含めて）や通常の土坑のほか、焼土跡・ピット群などがあり、ピット群の一部は掘立柱建物跡や竪穴住居跡として復元できる。特にピット群は、貝の花貝塚の調査でも早くから指摘されてきたように、窪地内に特徴的に検出される遺構であろう。このほか祭祀遺物の集中地点や土坑墓も検出されている。中心部には、三輪野山貝塚の大石や寺野東遺跡の石敷き台状遺構、赤城遺跡の水場遺構とみられる竪穴遺構など、特殊遺構と言えるものがやや目立つ。上宮田台遺跡と祇園原貝塚では、住居跡や土坑といった通常の遺構が確認された。しかし遺構と遺物包含層の関係によって検出状況はまったく異なる。上宮田台遺跡では主要な遺構の時期と包含層の主体時期には隔たりがあり、祇園原貝塚では後期の遺構とそれを覆う包含層の時期は概ね一致する。他の遺跡では、寺野東遺跡ではほぼ一致し、三輪野山貝塚でも掘立柱建物や墓坑群など主要な遺構は一致する傾向にある。

検出された遺構のなかで特殊遺構とみられるものには、三直貝塚・貝の花貝塚の焼土遺構、赤城遺跡の祭祀遺物集中地点が挙げられる。焼土遺構は通常の炉跡とは異なるものを指す。祭祀遺物の集中については、特に報告されているものだけ取り上げた。本報告未刊行の遺跡もあり、今後改めて認定基準については考えなければならないだろう。三輪野山貝塚の大石は、単に遺物として出土したというより、意図的に置いたとも考えられる。寺野東遺跡の石敷き台状遺構は、裾部分を削り出して成形しており、分布位置からみても祭祀的な性格の強い遺構かと思われる。井野長割遺跡の「内盛土」も同様な性格か。これらの遺構は、窪地での祭祀行為を想起させるものであり、同時に窪地形成に人為的営為が関与した可能性を示している。

以上、窪地の形成経緯について、遺跡から抽出できる要素を比較して人為的なものか自然地形なのか判断する根拠を考えてみた。比較した項目には互いに相関性のみられるものもあり、一方で類型が共通する遺跡間でも個々の状況には違いもみられた。また、今回は比較対象にしなかった要素のひとつとして、窪地での焼けた骨片・骨粉の出土がある。盛土周辺での検出も報告されており、後・晩期集落に特有な事象とみられるが、これまであまり検討されることはなかった。特殊遺物の出土状況とも合わせて、今後の検討課題であろう。

今回の検討で、窪地に対する従来のような一元的な捉え方には限界があることを検証できたと思われる。こうした見方に対しては既に懸念が示されてきた⁽¹⁴⁾が、改めて問題となるのは、議論の対象が集落形成以前の当初からの窪地地形と、現状で確認できる最終的な形態の両者が明確には区別されずに推移してきたことであろう。自然地形説はもともと窪地が存在した点に論点が置かれ、これは集落形成以前の当初地形を対象としている。これに対し人工説は窪地が削平されたことを主な論拠とし、再堆積ロームのあり方や遺物出土状況も合わせて、発掘調査で得られた現状の知見をもとにしている。これは集落が形成された後の最終的な形態を対象にしている。この点は、もともと窪地地形が存在したことを認めながら人為的営為の結果として現状の窪地が形成されたという考え⁽¹⁵⁾からもわかる。一方で自然地形説も、三直貝塚や寺野東遺跡の窪地に対しては人為の介在を認めてもきた⁽¹⁶⁾。このように窪地の成因をめぐる議論は説によって対象物がずれているためにかみあってこなかったと言えよう。

5. おわりに

縄文時代後・晩期の窪地地形を持つ集落遺跡について、最近の調査例を取り入れながら比較検討を加えてみた。その結果、各遺跡によって様々な様相であることを改めて認識することができた。また、窪地の成因について、自然地形説か人工説のどちらか一方で一元的に把握することは現実的ではないことが確認された。井野長割遺跡のシンポジウム（佐倉市教委・（財）印旛郡市文セ2004）でも、遺跡ごとの多様性が認識されている。今後は、資料数の増加に伴ってますます複雑化していくことが予想される。本稿ではこれらの資料を理解していく上での切り口を若干考えてみた。今回想定した類型にあてはまらない事例もあると思われる。今後もさらに類例の検討を続けていきたいと考えている。なお、事例の記述にあたっては、文献からの情報のみにより、調査担当者諸氏への事実確認等は果たせなかった。それゆえ資料の読み込みが不十分な点もあるかと思われる。ご指摘いただければ幸いである。

註

- (1) 寺野東遺跡の成果については、概報（江原ほか1994）をはじめ、8冊の本報告が刊行されている。
このうち縄文時代に関わるものは、第二冊（『寺野東遺跡Ⅱ－縄紋時代 土坑編』）から第五冊（江原ほか1997）である。
- (2) 堀越正行氏の論考（堀越 1995）を端緒とし、こうした視点での研究史回顧が成されている（江原 1999b、2001）。
- (3) 大正末期（1926年）に調査された市川市姥山貝塚の報告（松村・八幡・小金井 1932）で、中央窪地に関する記述がみられる。
- (4) 前掲（堀越 1995）及び阿部芳郎氏の論考（阿部 1996）が挙げられる。
- (5) 江原英氏による成果（江原 1999a）
- (6) 四街道市八木原貝塚と佐倉市曲輪ノ内貝塚での調査（阿部 2003及び 2004a）
- (7) 佐倉市教育委員会と財団法人 印旛郡市文化財センター主催による。
- (8) 住居跡とされる遺構は、姥山貝塚に1～2年先立ち富山県朝日貝塚や東京都高ヶ坂遺跡で調査されていたが、これらは明確な竪穴構造ではなかった。（以下の文献による）
村田文夫1999「遺構研究 竪穴住居址」『縄文時代』第10号 第3分冊
- (9) 近藤敏1987『菊間手永遺跡』財団法人 市原市文化財センター
- (10) （近森・山岸1983）のほか、林田利之2000『吉見台遺跡A地点』財団法人 印旛郡市文化財センター
- (11) 池上啓介・大給尹1936「千葉県東葛飾郡鎌ヶ谷村中澤貝塚発掘報告」『史前学雑誌』8-4や『鎌ヶ谷市史』の記述のほか、鎌ヶ谷市教育委員会による調査概報が多数発行されている。
窪地に関わる文献として、犬塚俊雄1990『平成元年度鎌ヶ谷市内遺跡群発掘調査概報』、1992『平成3年度鎌ヶ谷市内遺跡群発掘調査概報』鎌ヶ谷市教育委員会 が挙げられる。
- (12) 高谷英一・喜多裕明ほか1998『宮内井戸遺跡Ⅰ地区』財団法人 印旛郡市文化財センター のほか、同報告以降の文献として『財団法人 印旛郡市文化財センター年報』16（2000）、19（2004）がある。
- (13) 上宮田台遺跡の紹介は、筆者が執筆した遺跡紹介の先行文献をもとに記述するかたちをとるが、実際には先行文献の発行も本稿と近い時期となってしまった。
- (14) 江原英氏の研究史回顧のなかで（江原1999b）。第2章参照。
- (15) 三輪野山貝塚での所見（小川・小栗2003）

(16) 堀越正行氏の見解による(堀越2001)。及びシンポジウム『井野長割遺跡を考える』の討議のなかで。

同シンポジウムで阿部氏が自然地形説の論拠とした曲輪ノ内貝塚は、再堆積ロームの存在しない遺跡であった。また遺物の出土状況は間層介在型とみられ、今回の検討で自然地形と判断した事例とよく似ている。

引用・参考文献

- 新屋雅明ほか 1988『赤城遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
- 阿部芳郎 1996「縄文時代のムラと「盛土遺構」—「盛土遺構」の形成過程と家屋構造・居住形態」『歴史手帖』24-8
2003「遺跡群と生業活動からみた縄文後期の地域社会」『縄文社会を探る』学生社
2004a「縄文時代後晩期における谷奥型遺丘集落の研究」『駿台史学』第122号
2004b「縄文後晩期の集落構造と「盛土遺構」」シンポジウム『井野長割遺跡を考える』～環状盛土をめぐる～
- 今井公子 1982「いわゆる馬蹄形貝塚の中央凹地についての一考察」『論集 房総史研究』
- 財団法人 印旛都市文化財センター 2003a『財団法人 印旛都市文化財センター年報』18—平成13年度—
2003b『井野長割遺跡現地説明会資料』
2004『財団法人 印旛都市文化財センター年報』19—平成14年度—
- 江原 英ほか 1994『寺野東遺跡—発掘調査概要報告—』栃木県教育委員会・小山市教育委員会・財団法人 栃木県文化振興事業団
1997『寺野東遺跡V—縄文時代 環状盛土遺構・水場の遺構編』栃木県教育委員会・財団法人 栃木県文化振興事業団
- 江原 英 1999a「寺野東遺跡環状盛土遺構の類型—縄文後・晩期集落の一形態を考える基礎作業—」『研究紀要』7 栃木県埋蔵文化財センター
1999b「遺構研究 環状盛土遺構」『縄文時代』第10号 第3分冊
2001「環状貝塚・環状盛土遺構」発表要旨『縄文時代集落研究の現段階』
2004「寺野東遺跡について」シンポジウム『井野長割遺跡を考える』～環状盛土をめぐる～
- 大内千年 2001『主要地方道松戸野田線住宅地関連埋蔵文化財調査報告書』—流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前—
財団法人 千葉県文化財センター
- 小川勝和・小栗信一郎 2003「遺跡速報 三輪野山貝塚」『考古学ジャーナル』No.509
2004「三輪野山貝塚について」シンポジウム『井野長割遺跡を考える』～環状盛土をめぐる～
- 小川和博・菅谷道保ほか 1983『上総国分寺台発掘調査概要X I 祇園原貝塚Ⅲ』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 沖松信隆 2005「袖ヶ浦市上宮台遺跡の縄文時代後・晩期集落について」『研究連絡誌』67 財団法人 千葉県文化財センター
- 小倉和重 2001「井野長割遺跡—縄文時代のスペースデザイン、「円環の秩序」—」『(財) 印旛都市文化財センター 第5回遺跡発表会 発表要旨』
2004『井野長割遺跡(第5次)—市内重要遺跡確認調査報告書—』佐倉市教育委員会
- 小倉和重・田中大介 2004「井野長割遺跡について」シンポジウム『井野長割遺跡を考える』～環状盛土をめぐる～
- 小栗信一郎 1989『三輪野山遺跡群—昭和63年度確認調査概報—』流山市教育委員会
1999「三輪野山貝塚」『平成10年度 千葉県遺跡調査研究発表会 発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会
2000「三輪野山貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 忍澤成視 1995「13.根田祇園原貝塚(第5次調査)」『市原市文化財センター年報』平成3年度
1999『祇園原貝塚—上総国分寺台遺跡調査報告V—』市原市教育委員会

- 貝塚爽平・杉原重夫 1976「加曾利貝塚の地理」『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
- 神尾明正 1961「園生貝塚の発掘による地形面とその考察」『千葉大学文理学部紀要』4-1
- 財団法人 君津都市文化財センター 2002「君津都市文化財センター 年報」No.20—平成13年度—
2003「君津都市文化財センター 年報」No.21—平成14年度—
- 後藤和民 1973「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房総地方史の研究』
- 近藤 敏 1992「2.根田祇園原貝塚遺跡（5次調査）」『第7回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』平成3年度
1993「房総半島の新时期火山灰の降下について」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』
- 酒詰伸男 1967『貝塚に学ぶ』学生社
- 佐倉市教育委員会・財団法人 印旛郡市文化財センター 2004 シンポジウム『井野長割遺跡を考える』～環状盛土をめぐる～
- 清水潤三・鈴木公雄 1974『井野長割遺跡概報』佐倉市文化財調査報告1
- 清水潤三 1976「加曾利南貝塚の形成」『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
- 杉原重夫 1971「一 地形の発達」『市川市史』第一巻 原始・古代
- 杉原荘介編 1976『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
- 杉原荘介ほか 1971『市川市史』第一巻 原始・古代 吉川弘文館
- 杉原荘介・戸沢充則 1971「四 貝塚文化—縄文時代—」『市川市史』第一巻 原始・古代
- 関根孝夫 1982「貝の花遺跡」『縄文文化の研究』8
- 田中大介 2003「井野長割遺跡（第7次）—窪地に花開いた縄文のムラー」『（財）印旛郡市文化財センター 第7回遺跡発表会発表要旨』
- 近森正・山岸良二ほか 1983『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市遺跡調査会・佐倉市教育委員会
- 戸谷敦司 2004『井野長割遺跡（第4次調査）』財団法人 印旛郡市文化財センター
- 流山市教育委員会 2001『三輪野山貝塚現地説明会資料 三輪野山貝塚第8地点の調査』
2004『第2回 三輪野山貝塚発掘調査現地説明会 第5貝塚と斜面盛土の調査から』
- 中野修秀 1983「Ⅱ 遺構と遺物 1. 縄文時代 遺物群」『上総国分寺台発掘調査概要XⅠ 祇園原貝塚Ⅲ』
- 古里節夫 2000「貝の花貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県
- 堀越正行 1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』26
2001「第3回最新出土資料巡回展に伴う講演会の記録集（3）縄文の大土木工事」『研究連絡誌』60 財団法人 千葉県文化財センター
- 松村瞭・八幡一郎・小金井良清 1932「下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡」『東京帝国大学理学部人類学教室研究報告』第5編
- 八幡一郎・岩崎卓也・関根孝夫ほか 1973『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
- 吉住さと子・森田浩史・金丸武司 2003「遺跡速報 本野原遺跡」『考古学ジャーナル』No.498
- 吉野健一 2001「第3回最新出土資料巡回展に伴う講演会の記録集（2）君津市三直貝塚の調査」『研究連絡誌』60 財団法人 千葉県文化財センター
2002「三直貝塚」平成13年度 千葉県遺跡調査研究発表会 発表要旨
2003「三直貝塚の遺構分布と盛土遺構の断面」『研究連絡誌』65 財団法人 千葉県文化財センター
2004「三直貝塚について」シンポジウム『井野長割遺跡を考える』～環状盛土をめぐる～
- 米田耕之助・小川静夫ほか 1979『上総国分寺台発掘調査概要Ⅵ 祇園原貝塚Ⅱ』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 米田耕之助ほか 1977『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ 上総国分寺台遺跡調査団

和島誠一 1948「原始聚落の構成」『日本歴史学講座 第1巻』学生書房

挿図出典

- 第1図 (沖松2005) 図2を縮小転載
- 第2図 (沖松2005) 図3を改変
- 第3図 (吉野2003) 第2図と第3図を編集・改変
- 第4図 (吉野2003) 第1図を縮小転載
- 第5図 (近藤1993) 第15図を縮小転載
- 第6図 (忍澤1999) 第496図と第497図を編集・改変
- 第7図 (八幡・岩崎・関根ほか1973) 別図3と別図4を縮小転載
- 第8図 (八幡・岩崎・関根ほか1973) 別図1と別図9を縮小・編集・改変
- 第9図 (小川・小栗2003) 図2を縮小転載
- 第10図 (小川・小栗2003) 図3を縮小転載
- 第11図 (戸谷2004) 第4図と(田中2003) 第2図を縮小・編集・改変
- 第12図 (江原ほか1997) 第121図と第422図を編集・改変
- 第13図 (江原ほか1997) 第417図を改変, 第503図を縮小転載
- 第14図 (新屋ほか1988) 第91図を縮小転載
- 第15図 (新屋ほか1988) 第92図を縮小・編集